

503
184



始



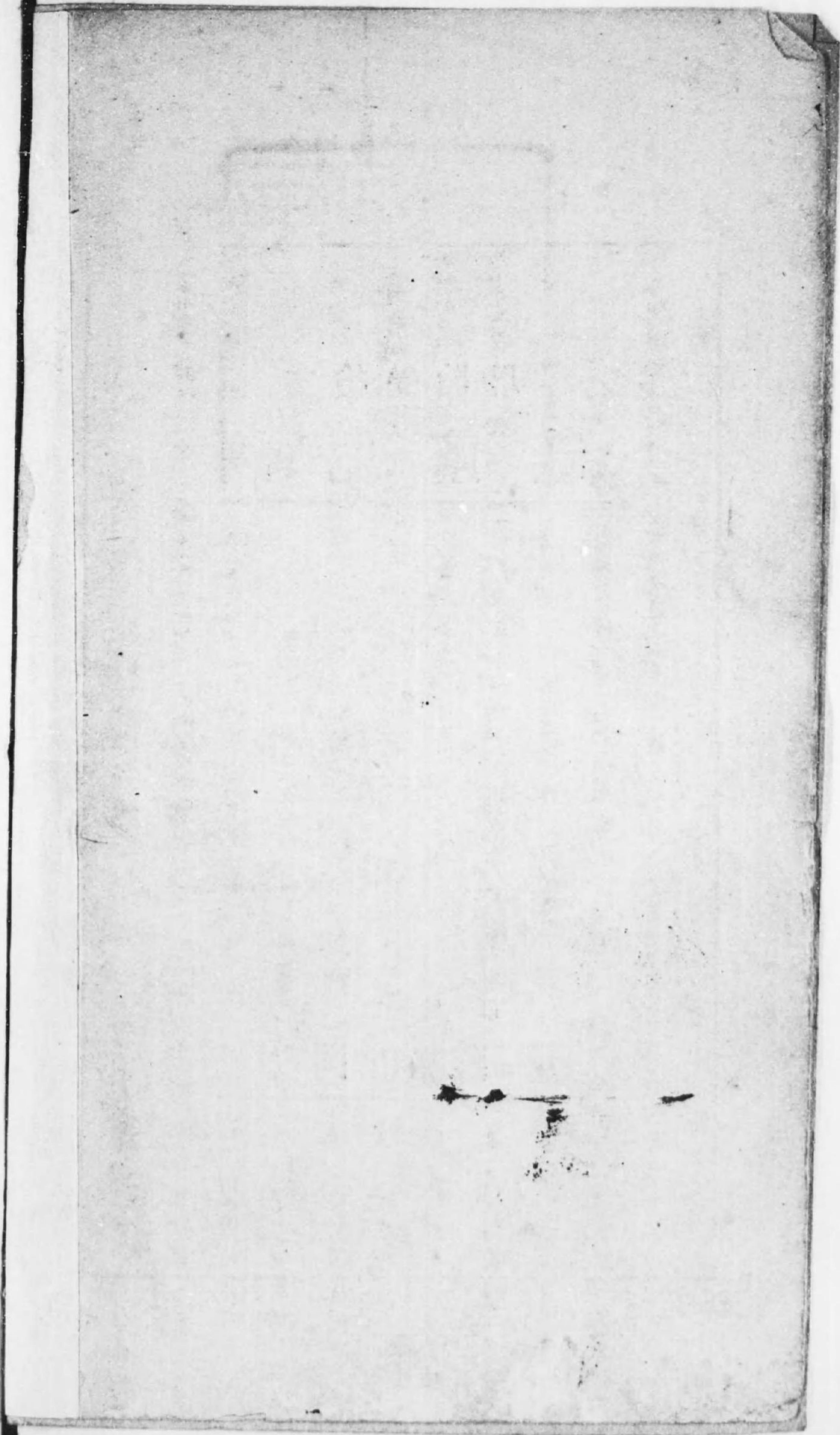
503-184



文檢受驗用
論語解義

東京神田
大田館藏版

大正
12. 2. 10
内交



序

本會が「四書研究」を編輯し、書肆大同館所意外の好評を博し、年ならずして増版また増版を重ね、検定用書として斯界に重きをなすに至つた。而も該書は其の目的とする所が大學・中庸・論語・孟子の思想學說の研究に在たが故に、所謂本文の講義は全然抜きにした。然る所其の後諸方の御仁より、「文章の講義」と「思想學說の敘述」と、更に「其の批評」とを試みたる、完備せる書を出版せられんことを希望する向が多かつた。此に於てか本會は此の種の希望と要求とに應ぜんため、其の企劃にとりかゝつた。其の方法は「文字文章の講義」は國漢科の合格者にして現に東京府立某中學校に職を奉ずる人に稿を依頼し、「思想學說」の方面は曩に「四書研究」を書きたる修身教育二科の合格者に依頼し、其の朱訂をば本會の顧問たる試験委員某博士（特に名を秘す）に頼んだのである。かくて不取敢出版すること、

なつたのが本書すなはち「論語解義」である。これは今後の國語漢文科受験者、修身科受験者は、恐らく論語に關しては他の書を見ず、要は無いであらう。何となれば本書は解題に始まり文章の講義に移り、更に論語の言著する(一)根本思想、(二)倫理思想、(三)政治思想、(四)教育思想、(五)人性に關する思想、(六)宗教思想を明細に叙述し、最後にこれら各思想學說の長短を本質的に批評し、以て「論語研究」としては、これ以上に出ずる能はざるを期したからである。次に文字文章の講義や思想學說の叙述は、専ら現代試験委員の所見所述を本とし、成るべく著者の私見獨斷を挿入することを避けた。隨て讀者は安心して本書に記す所に依て答案を認めてよいのである。蓋し檢定用書として閱然する所無かるべきを私かに誇る所以である。受験の立場から今一つ考慮したことは、原文を態々と白文の儘にして置いて、研究者をして自ら返り點をつけ、讀み方に熟達せしむる方策を講じたことである。けれども其の次へ讀み方を示したれば、如何なる初學者と雖もこれがために原文を讀み得ないと云ふことは無い。白文と

したのは國漢文科受験者の爲めをはかつたものである。讀書力をつけるには、どうしても白文を讀む習慣をつけなければならぬ。

右の如き次第故、曩に「四書研究」を求められた人は、更に本書に依て論語の研究を完全にすべく、本書を讀む者は「四書研究」をも併せ讀んで、以て聖典の研究を完うすべきである。一言記して以て序文となす。——大學・中庸・孟子續刊。

大正十年六月

文檢
受驗用
論語解義
目次

第一篇 論語解題

一、書名……………一

二、編者……………二

三、體裁……………三

四、傳來……………三

五、註釋……………四

六、孔子之略傳……………四

七、孔門の弟子……………七

目次

類	書	目	著	類
文學博士	支那哲學史講話	支那哲學史講話	支那哲學史講話	文學博士
宇野哲人著	●支那哲學史講話	支那哲學史講話	支那哲學史講話	宇野哲人著
文學博士	支那哲學の研究	支那哲學の研究	支那哲學の研究	文學博士
宇野哲人著	●支那哲學の研究	支那哲學の研究	支那哲學の研究	宇野哲人著
文學博士	二程子の哲學	二程子の哲學	二程子の哲學	文學博士
宇野哲人著	●二程子の哲學	二程子の哲學	二程子の哲學	宇野哲人著
文學博士	四書講義大	四書講義大	四書講義大	文學博士
宇野哲人著	●四書講義大	四書講義大	四書講義大	宇野哲人著
文學博士	四書講義中	四書講義中	四書講義中	文學博士
宇野哲人著	●四書講義中	四書講義中	四書講義中	宇野哲人著
教育學術會著	●受驗用四書研究	●受驗用四書研究	●受驗用四書研究	教育學術會著
全壹册	全壹册	全壹册	全壹册	全壹册

—(行發館同大)—

第二篇 論語講義

學而第一	20	22	一一
爲政第二			二五
八佾第三			四四
里仁第四			六七
公治長第五			八二
雍也第六	120		一〇六
述而第七	111		一二八
泰伯第八	177		一五
子罕第九	182		一七〇

鄉黨第十			二〇九
先進第十一			二三四
顏淵第十二			二五八
子路第十三			二八〇
憲問第十四			三〇四
衛靈公第十五			三二〇
季氏第十六			三三〇
陽貨第十七			三三七
微子第十八			三九九
子張第十九			三九九

堯日 第二十……………四

第三篇 論語の思想……………四

第一章 論語と孔子の思想……………四

一、孔子思想の由來……………四二

二、孔子思想の特色……………四二八

三、論語と孔子の思想……………四三一

第二章 論語の根本思想……………四三四

一、道……………四三四

二、一貫の道……………四三七

三、中庸論……………四四二

四、禮論……………四四五

五、仁論……………四五二

六、仁と禮と中庸との關係……………四六一

第三章 論語の倫理思想……………四六六

一、理想論(至善論)……………四六六

二、本務論(五倫説)……………四六九

三、徳論(三徳説・五常説)……………四七一

四、實踐道徳論……………四七四

イ、孝悌論……………四七五

ロ、君子論……………四八〇

五、修爲論……………四八四

第四章 論語の政治思想……………四八六

一、論語に所謂政治の意義……………四八六

二、政治の理想……………

三、政治の方法……………

 イ、主義||徳治主義……………四九二

 ロ、間接的方便||務本……………四九四

 ハ、直接的方便||禮治・仁政……………四九六

 ニ、其の他の方便||舉賢……………五〇〇

第五章 論語の教育思想……………五〇一

 一、目的觀||理想的人格の養成……………五〇一

 二、方法觀……………五〇三

 イ、主義||啓發主義・個性尊重主義……………五〇四

 ロ、方便||知育・徳育・美育……………五〇六

 ハ、教材||六經・六藝……………五〇八

第六章 人性に関する思想……………五一〇

- 一、性相近の説……………五一〇
- 二、性也直の説……………五一一
- 三、性三品の説……………五二二

第七章 論語の宗教思想……………五二四

- 一、拜天思想||上帝觀……………五二五
- 二、祭祀觀……………五二八

第八章 論語學說の批評……………五三一

- 一、倫理説批評……………五三一
- 二、政治説批評……………五二五
- 三、教育説批評……………五二七

四、人性說批評……………五二八

五、宗教說批評……………五二九

目 次 畢

第一章 緒言

第二章 宗教の概論

第三章 宗教の歴史

第四章 宗教の社會的意義

第五章 宗教の心理學的考察

第六章 宗教の哲學的考察

第七章 宗教の倫理的考察

第八章 宗教の政治學的考察

第九章 宗教の經濟學的考察

第十章 宗教の藝術學的考察

第十一章 宗教の科學的考察

第十二章 宗教の未來

文檢
受驗用 論語解義



論語解題

書名

論語は孔子の言行録である。かんしよげいもんし漢書藝文志によれば「孔子が其の弟子時人に應答し、及び相與に談論し、又夫子から聞いた語を筆記したのを、孔子の卒後與に論撰したから、之を論語と名づける」といつてゐる。又東漢の王充わんかうの論衡によれば、「論語はもと單に論といひ、傳といつて、西漢時代に古論、齊論、魯論と三種あつたが、西漢の末に張禹が齊論中の二篇を削り、魯論と合せて、今の論語二十篇とした」とある。

尙ほ何故に論語といつたかといふことについて種々の議論があるが、猪飼敬所は論は論説で、この書は孔門の論説の語なる故に論語といふ」と説いてゐる。しかし論語といふ書名は史記から始まりて孟子荀子には其語をとつてゐるが論語といふ名を引いてないから、孟子以後の編輯であらう。

二、編者

論語の篇者については、鄭玄は「仲弓子游子夏等孔子の直傳の弟子の篇である」といひ、朱子は「有子曾子の門人である」といふ。それは論語に有子曾子の二人が特子子の尊稱を以て書かれてあることを根據としてゐるが、荻生徂徠はそれを駁して「子と稱するは獨り有子曾子のみでなく、閔子冉子とあるからいつても朱子の説はとるに足らない。恐らく上論は琴張、下論は原思の篇であらう、それは二子のみ其の名を書してゐるから」と異説を立てゝゐるが信ずることは出来ない。之に反して佐藤一齋の意見は

餘程妥當で「戰國の末に憂道の士が孔門各派の傳へた筆記を哀輯しよしよして一書となしたのであらう。故に或は子と敬稱し或は單に名を書し、或は字を書する等、門人の自記、又弟子の筆記等種々のものを集めたのであらう」と説いてゐる。

三、體裁

全篇二十卷。卷名は首章の文字を取つて名づける。

學而、爲政、八佾、里仁、公冶長、雍也、述而、泰伯、子罕、鄉黨、先進、顏淵、子路、憲問、衛靈公、季氏、陽貨、微子、子張、堯曰、

四、傳來

我國に傳はつたのは、應神帝の十六年で百濟の王仁が論語十卷を獻ずとある。此の時の註は何晏の集解即ち古註であつた。足利時代には圓珠經といつて尊ばれ、やがて

朱子の新註が入り、徳川時代に於て一層盛になつて、伊藤仁齋の如きは「最上至極字宙第一の書」と尊んだ。

五、註釋

註釋書は汗牛充棟もたゞならずある中に最も著しいのは魏の何晏の古註即ち「論語集解十卷」と、宋の朱子の新註即ち「論語集註十卷」である。

日本に於ては伊藤仁齋の「論語古義十卷」、荻生徂徠の「論語徵十卷」、安井息軒の「論語集說六卷」中村惕齋の「論語示蒙自解」等がある。

六、孔子の略傳

(朱子の論語序説を假名交り文に改めて紹介する)

史記世家に曰く、孔子字は仲尼、其の先は宋人。父は叔梁紇母は顔氏、魯の襄公二

十二年庚戌の歳十一月庚子を以て孔子を魯の昌平郷陬邑に生む。兒たりし時嬉戯するに常に俎豆を陳ね、禮容を設く。長するに及んで委吏となり、料量平かなり。司職吏と爲るや畜蕃息す。周に適きて禮を老子に問ふ。既に反つて弟子益々進む。昭公二十五年甲申孔子年三十五、昭公齊に奔り、魯亂る。是に於て齊に適き、高昭子の家臣となつて以て景公に通ず。公封するに尼谿の田を以てせんと欲す。晏嬰可かず。公之に惑ふ。孔子遂に行りて魯に反る。定公元年壬辰、孔子年四十三にして季氏強僭す。其の臣陽虎亂を作し政を專にす。故に仕へずして退く。詩書禮樂を修む。弟子いよく衆し。九年庚子、孔子年五十一、公山不狃費を以て季氏に畔いて召ぶ。孔子往かんと欲して卒に往かず。定公孔子を以て中都の宰となす。一年四方之に則つとる。遂に司空となり、又大司寇となる。十年辛丑、定公を相けて齊侯に夾谷に會す。齊人魯に侵地を歸へす。十二年癸卯、仲由をして季子の宰となりて三都を墮ち、其の甲兵を收めしむ。孟氏成を墮つを肯んぜず。之を圍んで克たず。十四年乙巳、孔子五十六、相事を

攝行し、少正卯を誅す。國政に興り聞くこと三月、魯國大いに治まる。齊人女樂を歸つて以て之を沮じ。季桓氏之を受く。郊して又膳俎を大夫に致さず。孔子行る。衛に適き、子路の妻の兄顔濁鄒の家を主とす。陳に適き匡を過ぐ。匡人以て陽虎と爲して之を拘ふ。既に解かれて衛に還つて蘧伯玉の家を主とす。南子を見る。去つて宋に適く。司馬桓魋之を殺さんと欲す。又去つて陳に適き、司城貞子の家を主とす。居ると三歳にして衛に反る。靈公用ふる能はず。晉の趙氏の家臣佛肸中牟を以て畔き孔子を召ぶ。孔子往かんと欲して亦果さず。將に西の方趙簡子を見んとす。河に至つて反る。又蘧伯玉の家を主とす。靈公陳を問ふ。對へずして行る。復た陳に如く。季桓子卒す。遺言して康子に謂つて必ず孔子を召べと。其の臣之を止む。康子乃ち冉求を召ぶ。孔子蔡及び葉に如く。楚の昭王將に書社の地を以て孔子を封ぜんとす。令尹子西さかずして乃ち止む。又衛に反る。時に靈公已に卒す。衛君輒孔子を得て政を爲さんと欲す。而して冉求季氏の將となつて、齊と戦つて功あり。康子乃ち孔子を召んで孔

子魯に歸る。實に哀公の十一年丁巳にして孔子年六十八なり。然るに魯終に孔子を用ふる能はず。孔子も亦仕を求めず。乃ち書傳禮記を叙し、詩を刪り樂を正し易の象繫象說卦文言を序す。弟子蓋し三千、身六藝に通ずる者七十二人。十四年庚申魯西こよして麟を得たり。孔子春秋を作る。明年辛酉、子路衛に死す。十六年で子卒す。年七十三。魯の城北泗の上に葬る。弟子皆心喪に服する三子貢家上に慮する凡そ凡て六年孔子鯉を生む。字は伯魚、先つて字は子思。中庸を作る。

七、孔門の弟子

門弟子三千人。六藝に通ずる者七十二人。そのうち最も著れ顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、政事に於ては冉有季路、言語に子游子貢。之を孔門の十哲といふ。今その主なる人々の小

顔回。魯人、字は子淵。孔子より若きこと三十歳。孔子
した。不幸短命三十二歳で死んだ。孔子は之に哭して慟した。

閔損。魯人、字は子騫、孔子より若きこと十五歳。孔子は孝
ゐる。汗君の祿を食ひを屑しとせず、再び我を召ぶ者あらば去り
といつた清廉の士。

冉耕。魯人、字は伯牛。惡疾をもつてゐたので孔子は「この
と嘆ぜられた。

冉雍。魯人、字は仲弓。孔子より若きこと二十九才。孔子之を評
ひべしといはれた。

冉求。魯人、字は子有、冉雍と同年。季氏の宰となつて齊を討つて功を立てた。

仲由。卞人、字は子路或は季路。孔子より若きこと九歳。勇氣ありて志氣愷直。衛
の難に死んだ。死に臨んで纓を結んだといふ勇者。孔子は甚だ之を重んじて、「道行

はれず、桴にのりて海に浮ばん、吾に従ふ者は其れ由か」といはれた。

宰予。魯人、字は子我。晝いねて大いに孔子に叱られた。

端木賜。衛人、字は子貢。孔子より若きこと三十一歳。孔子は賜や瑚璉（貴器）なりと評した。孔子の喪に従ふこと六年。

言偃。吳人、字は子游。孔子より若きこと四十五才。武城の宰となつて絃誦を起して之を治めた。

卜商。衛人、字は子夏。孔子より若きこと四十四才。孔子の没後西河に居つて子弟を教授す。經書の傳多くこの人より出た。

顓孫師。陳人、字は子張。孔子より若きこと四十八才。

曾參。南武城の人、字は子輿。孔子より若きこと四十六歳。孝經の作者で子思の師

原憲。魯人、又は宋人といふ、字は子思。孔子より若きこと三十六歳。

樊須。魯人、或は齊人といふ、字は子遲。孔子より若きこと三十六歳。

有若。魯人、字は子有。容貌が孔子に酷似してゐた。

説小悦

第二編 論語講義

學而第一

第一章の首の二字を取つて篇名とす。以下爲政八佾皆同じ。此の章凡そ十
す所、本を務むるの意が多い。

子曰、學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知、而不愠、不亦
子乎。

【讀方】 子曰く學びて時に之を習ふ。亦説はしからずや。朋あり遠方より
樂しからずや。人知らずして愠らず。亦君子ならずや。

【字義】 ○子、男子の尊稱、孔子を指す○時習之、學んだこと
翫味すること○不亦説乎、説は悦ぶ、喜ばしいことではない

第二編 論語講義

説小悦

説小悦

成れるを知らずして擧げ用ひぬこと。○是、いふことばる○君子

【義解】孔子曰く、人たるの道を行くは又時を察しずれば、

して吾が身に體得するに至る。之は説ば、いふことばる。意を

士がはるく、遠方から尋ね來つて互に講習進歩することばあはれしいことば

我が學徳すでに成就したのに、上位の人が嫌用するを知らなくとも、自ら天命

じて悠々道を樂しむは成徳の君子人ではないか。

有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣、不犯上而好作亂者、未之有也。

本、本立而道生、孝弟也者、其爲仁之本與。

【讀方】有子曰く、其の人と爲り、孝弟にして上を犯すことを好む者、いふ。上を

犯すを好むとして亂を作すことを好む者は、未だこれあらざるなり。君子は本を爲し

本立つて、生ず。孝弟は其れ仁を爲すの本與。

【字義】○有子、孔子の弟子、姓は有、名は若○孝弟、

欠

欠

子貢曰、夫子温良恭儉讓以得之、夫子温良之也、其諸異

【讀方】子禽子貢に問ふて曰く、夫子是邦に至るや、必ず其の政
るか、抑之を與ふるか。子貢曰く夫子温良恭儉讓以て之を得たり
ひるや、其れ諸れ人の之と求むると異るか。

【字義】○子禽、孔子の弟子、一説には子貢の門人とも。姓は
子禽○子貢、孔子の門人、姓は端木、名は賜字は子貢○夫子、孔子を
を尊稱する詞○是邦、唯一國をさすのではなく、適く所の邦をいふ○温
和らか、良は素直、恭は丁寧、儉はつつしむること、讓はへりくが
で意味はない。

【義解】子禽が子貢に問ふには、「我が先生孔子がどうして邦へ行か
國の政事の相談をうけられるのは不思議である、一體夫子がどうして
又は國王の方からと興へになるのでせうか。と。そこで子貢は

良恭儉讓の五徳を具へられてゐる爲めに、自ら進んで其國の政事を興り聞かうとはさ
れないでも、國君から頼みになるのである。ここが普通の人の求めて自説する
とする者と異なる所である」といはれた。

子曰、父在觀其志、父没觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。

【讀方】 子曰く、父在は其の志を觀、父没すれば其の行を觀る。三年父の道を改
むる無きは、孝と謂ふべし。

【字義】 三年、必ずしも三年と限るにあらず、久しきをいふ。父之道、父の仕方

【義解】 人の子たる者は父の生存中は其の志に向ふ所を察して之れに奉じ、其の没
後は生前の行つた迹をみて之を繼續して行ひ、三年五年の長い間もかへないのは孝と
いふべきである。蓋し孝の方法でなくて孝の本意をいふ。

有子曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、大小由之。有所不行、知和而和、不以禮
節之、亦不可行也。

【讀方】 有子曰く、禮は之和を用つて貴しとす。先王の道斯を以て之を節
に由る。行はれざる所あり。和を知つて和するも、禮を以て之を節
るべからざるなり。

【字義】 ○禮之用和爲貴、朱子は「禮の用は和を貴しとなす」と
らず。用は以て、禮は人のふむべき儀則、和は和順、睦み合ふこと
堯舜禹湯文武○有所不行、意志が阻隔して行はれない。○節之、禮を
【義解】 有子曰く、禮は尊卑長幼を分ち百般の行動を定めたるもの
に流れることがあるので、それを調和するに和順を兼ねさせること
も此の禮と和とをかねたることを以て善美となした。事の大小皆と
ので、此の一方をかくるも行はれない。そこで禮が行はれないか
でも、あまりに和に流れると、亂雜不規律に陥る易いから、之を
なければならぬ。

13

有子曰、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也。

【讀方】 有子曰く、信義に近ければ、言復むべきなり。恭禮に近ければ、さがるなり。因ること其の親を失はざれば、亦た宗とすべきなり。

【字義】 ○言可復也、言は約束の言葉、復は履む、履行すること。○因、人に頼ること。○親、親睦の道。○宗、宗敬。

【義解】 有子の曰く、人と約した言が義に近ければその言は履行することが出来る。恭敬であつて禮に近ければ恥をうけることはない。人に親しみ交はるに親睦の意を失はなければ尊敬すべきである。

子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、斂有道而正焉、可謂好學也已。

【讀方】 子曰く、君子は食飽くことを求むる無く、居の安きを求むる無し。事に敏にして、言に慎み、有道に就きて正す、學を好むといふべきのみ。

【字義】 ○飽、腹一杯に美食する。○敏於事而慎於言、行事は敏速にして言語は妄り

に發しない。○就有道而正焉、有徳の人に近づいて己が行を正す。

【義解】 君子は美食を飽食することや、安樂な住居に起き臥しすることを求めない。食は身を養ふに足り、居は身を容るるに足れば満足してゐる。そして行は敏速に滯滞せず、その言語は慎しんで妄りに發しない。その上有徳の君子に接近して、自己を正すことを心掛ける。かくの如き人にして始めて學を好むの士と稱すべし。

子曰、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰、可也、未若貧而樂、富而好

學、詩云、如切如磋如琢如磨其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言知來者。

【讀方】 子貢曰く貧にして諂ふなく、富んで驕るなきは如

く貧にして樂しみ、富んで禮を好む者には若かさるなり。

が如く、磋ぐが如く琢つが如く、磨ぐが如しとは、其の始與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて來を知る者

【字義】 ○可也、宜しい、しかし十分ではない○詩云、衛風、

琢如磨、骨の細工を切るといひ、象牙の細工を磋ぐといひ、玉の細

石の細工を磨くといふ。すべて徳を磨くに譬ふ○賜、子貢の名○告諸行

既往の事をつげると自ら將來の事を知る。

【義解】 子貢が、「貧しくて語はず富んで傲慢となつて人に驕ぶることか

と問ふと、孔子の答へには「それは先づ宜しい。しかし至れるものではない。

に居て貧を樂しみ、富貴となつて禮節を好む者には比することは出来ない」といはれ

た。そこで子貢は大いに悟つて、「學問は際限のないもので、私が貧富に處する最上

の道と思つてゐたのに、先生のお言葉で更にその上の境地のあることを知りました。

之は詩にある所の切るが如く磋ぐが如し云々の詩はこのことをいつたものでございま

せう。」と申すと、孔子は子貢の一を聞いて二を知る聰明をほめて、「汝は共に詩を語

ることが出来る。過去の事を告げれば將來の事を知得する汝の聰明には感心の外はな

い」と稱揚された。作あ

16 子曰、不患人之不己知、患不知人也。

【讀方】 子曰く、人の己れを知らざるを患へず、人を知らざるを患ふ。

【字義】 ○患、心配する。

【義解】 道に志すは己れを人に知らるるためではない。己の徳を成就せんがため

ある。故に人の己れを知らないといふことを不平に思ふやうな事はせず、かゝつて

分が他人の正邪善惡を辨することの出来ないのを患ひとするのである。

爲政第二

爲政の題は首章の字をとつたもの、此篇凡そ二十四章

△子曰、爲政以德、譬如北辰其居其所、而衆星共之。

【讀方】 子曰く、徳を以てすれば、譬へば北辰其の所に居て、衆星共之。

爲政第二

共ふが如し。

【字義】 ○徳、人の天より受けた性、仁義禮知の總名○北辰、北極星○共之、共は向ふ、群星の北極星に向つて運行すること。

【義解】 孔子の曰く、政事をするに徳を以て天下に臨めば萬民歸服して之を信仰することは、譬へば北斗星が中心に居つて群星が之を環繞して運行するが如くである。

○子曰、詩三百一言以蔽之、曰思無邪。

【讀方】 子曰く詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く思ひ邪なし。

【字義】 ○詩三百、詩は三百十一篇あり、三百とは概數○蔽、包括し盡す、おしくるめていへば○思無邪、邪はよこしま邪惡の念、作者の心に私心なく眞情を流露してゐる。

【義解】 詩の數の多いこと三百有餘篇、その材題もその趣向も皆異つてゐるけれども一言にして之を蔽ふべき言葉がある。それは何かといへば思無邪の一語で作者の性

情に邪惡私曲の心なく、己が心の眞情を寫し出したものであるといへる。

○子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以徳、齊之以禮、有恥且格。

【讀方】 子曰く、之を道びくに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば、民免れて恥づることなし。之を道びくに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥づることありて、且つ格る。

【字義】 ○道之以政、人民を道びくに法令禁制を以てする○齊之以刑、之を齊一にして惡をなさしめないために刑罰を以てする○免、刑罰をのがれる○格、いたると訓

【義解】 孔子曰く、人民を道びくに法令を以てし、それに違背する者に刑罰をすれば、人民は刑罰を免かれる事のみを心がけて、衷心己れに恥づるなどいふ徳觀を有することがないであらう。之れに反して之を導びくに徳を以てし己れの修徳

を本として之れに臨み民の起居動作を制するに禮法を以てすれば、人民皆自己に恥ぢ

て敢て不善をなさず、心から正しい民となるであらう。

△子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩。

【讀方】 子曰く、吾十有五にして學に志ざし、三十にして立ち、四十にして惑五十にして天命を知り六十にして耳順がふ、七十にして心の欲する所矩を踰えず

【字義】 ○志于學、人道を學ぼうと決心する○立、徳業の成立つこと、識見の立つこと○不惑、是非の分別に迷はない○知天命、運命を知り明める○耳順、人の言が耳に逆らはない○不踰矩、矩は曲尺、法度の義。即ち思ふままに振舞つても法度にはづれないこと。

【義解】 孔子曰く、吾れ十五にして道に志ざし、三十にして自己の識見が立ち、四十にして是非逆順に迷はず、五十にして天命の如何ともすべからざるものあるを悟り、六十にして人の言葉が己が耳に逆らつて、怒り悲しむやうなことはなくなり、七十に

して心の思ふままに行動しても、何事も法度にかなふやうになつた。

△孟懿子問孝。子曰、無違。樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰、

曰、何謂也、子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮。
【讀方】 孟懿子孝を問ふ、子曰く違ふこと無かれと。樊遲御たり、子告之を告げて曰く、孟孫孝を我に問ふ、我對へて曰く、違ふこと無かれと、樊遲曰く何の謂をや。子曰く生には之れに事ふるに禮を以てし、死すれば之を葬るに禮を以てし、之に事ふるに禮を以てす。

【字義】 ○孟懿子、孟孫又は仲孫子といふ、名は何忌。魯の三大夫の禮に違ふなかれ○樊遲、孔子の門人、姓は樊、名は須遲は字○御、車を

【義解】 魯の大夫孟懿子が孝の道を尋ねられた時に、孔子は只一言違へられた。孟懿子が何に違ふ勿れかと押し返して聞くかと思つてゐたの以上は問はなかつた。そこで孔子は辭去する時に車を御してゐる門人の

とを語られた。すると道を好む樊遲は直ちに不審に思つて、違ふ勿れとはどかかと反問した。そこで孔子は「禮に違はないことである、それは生前に之れに禮を以てし、死後之を葬り祭るにも禮に違はないことである」と仰せられた。

△孟武伯問孝。子曰、父母唯其疾之憂。

【讀方】 孟武伯孝を問ふ。子曰く、父母は唯その疾をのみ之れ憂ふ。

【字義】 ○孟武伯、孟懿子の長子、名は彘○父母唯其疾之憂、之れには三説ある。父母は其の子の病氣を切に心配するから、己が身體を注意して心配かけないやうにせよといふのが一、父母をして其の子の病氣だけは心配させるがそれ以外の心配はかけないやうにせよといふのが一、父母に對して父母の疾をのみ心配するといふのが一、こゝには第一説をとる。

【義解】 孟武伯が孝道を尋ねられたから、孔子は對へて曰ふに、父母は其の子の疾病を心配すること非常なものであるから、身體を弱くして心配をかけるのは孝行では

ないによつて、子たる者は身を攝して健康を保たねばならぬ。

△子游問孝。子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬皆能有養、不敬何以別乎。

【讀方】 子游孝を問ふ。子曰く、今の孝は是能く養ふと謂ふ、犬馬に至るまで能く養ふことあり、敬せざれば何を以て別たんや。

【字義】 ○子游、孔子の門人、姓は言、名は偃字は子游○養 體を養ふこと 敬、尊敬。

【義解】 門人子游が孝を問ふたので孔子答へて曰く、「今の孝は父母の口傳きすることのみをいつてゐるが、一體衣食を供給するだけが孝ではない。至るまで食物を興へて保護してゐる。この點からいふも奉養以上に父といふことがなければ、犬馬と父母とに事ふる區別が立たないわけ

△子夏問孝、子曰、色難、有事弟子服其勞、有酒食先生饌、曾是以爲孝。 【讀方】 子夏孝を問ふ。子曰く色難し。事あれば弟子其の勞に服し、

生に饌せしむ。曾ち是を以て孝となさんや。

【字義】 ○色難、二顔色を和げて父母の意に奉ずることは難かしいものだ○弟子、
人○先生、師長○饌、飲食する○曾、すなはち。

【義解】 子夏が孝を尋ねた時に、孔子答へて曰く、「孝の最も難かしいことは顔色を和げて父母に事へることである。かの仕事のある場合に門人が勞役につき、酒食をたべる時に師長から先に食べさせるといふのは普通の事で、別に難事ではないが色を和げて父母を樂しませることが大切なことである」と仰せられた。

△子曰、吾與回言終日、不違如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚。

【讀方】 子曰く、吾れ回と言ふこと終日、違はざることを思ふ。私を省みるに、亦以て發するに足れり。回や愚ならず。

【字義】 ○回、孔子の高弟、姓は顔名は回、字は子淵○私、退而省其私、亦足以發、回也不愚を發することはない○私、家に居りての私情○發、自ら發し言明す。

【義解】 吾れ顔回と物言ふこと一日、回はたゞ黙して之をさき何等の疑問を挾まな
いこと愚者のやうである。しかし退いて家に居つて談話し動作する有様を見るに、我
が教へた事以上にある新理を創見し發明してゐるやうである。して見れば回は私の
ふことをよく理解した上に己が創造を加へてゐるのであるから、彼は決して愚人では
ない。

△子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。

【讀方】 子曰く其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、
焉んぞ廋さんや、人焉ぞ廋さんや。

【字義】 ○視其所以、以は爲す、視はよく見る、其行爲を視ること○觀其所由、
は視よりよく見ること、由は行のよつて來る所即ち動機○察其所安、安心満足する
を見る○焉、いづくんど、どうしてか○廋、かくす。

【義解】 人の善惡を識別するに其の爲す所を視其の行爲の由つて來る動機を尋

更に其の人の平常樂しむ所安んずる所を察すれば、如何なる人といへども、其の正當をかくすことは出來ないのである。即ち爲す所が善でも、動機に不純なるものは、其の時の動機や行爲がよくても、その人が善を樂しむ人か物質慾に安んずる人か、其の眞實に察することが出來ない。しかしこの三つを以て察すれば何人と雖もかくことは出來ない。

△子曰、溫故而知新、可以爲師矣。

【讀方】 子曰く故を温ねて新しきを知る。以て師となるべし。

【字義】 ○溫故、故は故事、溫はたづねる。

【義解】 古の聖人の書いた詩書を學習して故事を研究した上は、更に自己の識見によつて新らしい眞理を闡明し得る人、即ち故を學んで新らしきを知る人に於て、はじめて人の師たることが出来るのである。

△子曰、君子不器。

【讀方】 子曰く、君子は器ならず。

【字義】 ○君子。ここは君王、卿相のこと○器、器物、一技一藝ある人、しかしこの人は一方に偏してゐる。

【義解】 民に長たる君王卿相の如き人は、單なる技術家であつては、家は一方に偏して全體に通じない。故に君王たるべき人は徳を以て、格者でなければならぬ。

△子貢問君子。子曰、先行、其言而後從之。

【讀方】 子貢君子を問ふ。子曰く先づ行ふ。其の言は

【義解】 君子（徳ある人）とは何ぞとの子貢の問ひに答へ、重んずる人である。實行して後その言を出す、言行一致の人で、蓋し子貢の短所たる言辯を戒しめたのである。はまづ實行ならぬ」と、

△子曰、君子周而不比、小人比而不周。

△
【讀方】 子曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。

【字義】 ○周、満遍なく公平に深切をつくすこと○比、私情を以て或人に偏すること○小人、徳のない人。

【義解】 君子は公平にして博く人を愛し偏頗がない。小人は之れに反して或る一部の人を偏私に愛着するけれども、多くの人の愛することをしない。これ君子小人の別れる點である。

△子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。

【讀方】 子曰く學びて思はざれば則ち罔し。思ふて學ばざれば則ち殆し。

【字義】 ○罔、昏る○殆、危い。○思、思索研究の事。

【義解】 書を読み師の説を聞くのみで自分で思索しなければ、その學べる所昏く事に應用することも出来ない。又義理を思ひ思索を重ねても、廣く聖賢の書を読み師の説も聞かなければ、危ふく不安心にして斷行が出来ない。故に學究と思辨と共に併

せ用なければならぬ。

△子曰、攻乎異端。斯害也已。

【讀方】 子曰く、異端を攻むるは、斯れ害のみ。

【字義】 ○攻乎異端、端は始め、始め異なれば末に至るまで異なる、即ち我道に非ざる異種の學説、老佛墨楊の類、攻は治むること研究すること。但しこれには異説ありて攻を攻撃して異説を攻撃するとと解釋する者もある。

【義解】 孔子曰く我が道即ち先王の教以外の道を研究するは、肝要の先王の道をよりそかにする所以で害ありて益なきことである。

△子曰、由誨女知之乎、知之爲知之、不知爲不知、是知也。

【讀方】 子曰く、由女に之を知るを誨んか。之を知るを知るとし、之を知らざるを知らずと爲す、是れ知るなり。

【字義】 ○由、姓は仲、名は由、字は子路、孔子の門人○誨、教る○女、汝

【義解】孔子が子路に教へて曰ふには「汝に知るといふことの意義を教へよう。それはたしかに知つてゐることを知つてゐるとし、知らないことは知らないとするのである。世にはよく知らないことを知つたやうにして人にも疑問を質さないでしるものがあるが、之は到底眞の知を得ることは出来ない」と。蓋し子路の粗心にして問ふを恥づる弊あるを見て戒めたのであらう。

△子張學_レ臣_レ祿。子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔、言寡尤、行寡悔、祿在其中矣。

【讀方】子張祿を干ゆんとを學ぶ。子曰く多く聞いて疑はしきを闕き、慎んで其餘を行へば、則ち尤寡し。多く見て殆きを闕き、慎んで其餘を行へば、則ち悔寡し。言ひ寡く、行つて悔寡ければ祿其の中に在り。

【字義】○子張、孔子の門人、姓は顔孫、名は師、字は子張○學、問ふ○干祿、干は求む、祿は食祿、官吏となること○闕疑、疑がはしいのを除いて○闕殆、不安心な

ことを除いて。

【義解】子張が祿仕して官吏となる道を尋ねたので、孔子は答へて「は言行を慎しなればならぬ。そこで多く聞いた上でその中の疑のけて其の外の信用の出来ることを言へば、人に尤められ、行事を見た上でその中の不安心に思ふことを除いて其のすれば、後悔するやうなことはない。かくすれば修徳の君子となれば求めずして君相の推舉を得る。即ち言行を慎しむ中に祿仕の要領がある」と教へられた。

○哀公問曰、何爲則民服。孔子對曰、舉直錯諸枉、則民服、舉枉錯諸直、則民

【讀方】哀公問ふて曰く、何爲れば則ち民服せん。孔子對へて曰く、直き、諸を枉れるに錯けば、則ち民服す。枉るを舉げて諸を直きに錯けば、則ち

【字義】○哀公、魯の君、名は蔣○直、正直の人○諸、これ○枉、曲らむの○

おく、加へ置くこと。

【義解】 哀公が如何にすれば民が心服すべきかと問はれたについて、孔子の對へて曰ふには、「正直有道の君子を擧げ用ひて之れを枉れる不肖の者の上にあく時は。正なる人の壓力で不正なる者もよくなつて、自然と民も歸服する。之れに反して枉れる不肖者を擧げて之を正直なる人の上に用ひれば、不正がはびこつて、民を心服させることは出来ない。」

秀康子問、使民敬忠以勸、如之何。子曰、臨之以莊則敬、孝慈則忠、擧善而教不能則勸。

【讀方】 秀康子問ふ、民をして敬忠し以て勸ましむる、之を如何と。子曰く之に臨むるに莊を以てすれば則ち敬し、孝慈なれば則ち忠し、善を擧げて不能を教ふれば則ち勸む。

【字義】 ○季康子、魯の大夫季孫氏、名は肥○敬、尊敬○忠、忠義○勸、善に勸む

○莊、端正にして威嚴があること○不能、善をよくすることの出来ない者。

【義解】 季康子が問ふて曰く、「民をして上を尊敬して忠義を盡さしめ且つませぬには如何にしたらよからうか」と。孔子對へて曰く、「民に臨むに莊重すれば尊敬し、慈愛を以てすれば忠を致し、善人を擧げ用ひて不能者を教導すは善に勸むやうになる。」

或謂孔子曰、子奚不爲政。子曰、書云、孝乎、惟孝、友于兄弟、施於有政、奚其爲爲政。

【讀方】 或ひと孔子に謂つて曰く、子奚ぞ政を爲さざる。子曰く、孝が惟孝なり、兄弟に友に、有政に施すと。是れ亦政を爲すなり、奚ぞ其と爲さん。

【字義】 ○奚、何ぞ○書、書經君陳篇○孝乎惟孝、孝をほめた詞○友、こと○施於有政、施はあし及ぼす、有政の有は語助で政事のこと。

【義解】 或人が孔子に曰ふには「あなたは何故に政事に與らないのか」と孔子の答へるには「書經に、孝行と友愛とを以てしてそれを政に推し及ぼすとあるが、孝友、してよく一家を齊へるは之れ大にして國家を治めることになる、吾今子弟に孝友の道を教へるのは則ち政事をなすと同じではないか」と。

子曰、人而無信、不知其可也、大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。

【讀方】 子曰く、人にして信無くば、其の可なるを知らざるなり。大車輓なく小車軌なくば、何を以て之を行らんや。

【字義】 ○信、誠實で欺かないこと○大車、牛馬○輓、轅の兩端につけて牛をつける横木○小車、馬車○軌、馬をつける横木。

【義解】 「人にして信義をかくならば人として到底論ずるに足らない。譬へば牛車馬車に横木がない如くで、この横木がなければ車をやる事が出来ないと同じく、信義がなければ世に處し人と交はることが出来ない。」といはれた。

子張問、十世可知也。子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因殷禮、所損益可知也、其或繼周者、雖百世可知也。

【讀方】 子張問ふ、十世知るべきやと。子曰く殷は夏の禮に因る、損益する所知るべきなり、周は殷の禮に因る、損益する所知るべきなり、其れ周を繼ぐものあらば、百世と雖も知るべきなり。

【字義】 ○十世、天子姓をいふを一世といふ、十代の革命の後をいふ○殷、湯王より始まつて六百年○夏、禹より始まつて四百年○損益、損は減じ、益は増す、改革すること○或、ある(有)。

【義解】 子張が十代後の政治如何、前知し得べきかと尋ねたので、孔子は「殷は前代の夏の時代の禮に大體因つて改め、周は僅かであつた。周も亦前代殷の禮に因つて改革する所は小部分にすぎなかつた。之を以て見れば百代の後と雖もかくの如くであつて、忠孝五倫の道の如きは永世かはらず、道や禮の大法はかはることがない。」

【義解】 或人が孔子に曰ふには「あなたは何故に政事に與らないのか」と孔子の答へるには「書經に、孝行と友愛とを以てしてそれを政に推し及ぼすとあるが、孝友をしてよく一家を齊へるは之れ大にして國家を治めることになる、吾今子弟に孝友の道を教へるのは則ち政事をなすと同じではないか」と。

子曰、人而無信、不知其可也、大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。

【讀方】 子曰く、人にして信無くば、其の可なるを知らざるなり。大車輓なく小車軌なくば、何を以て之を行らんや。

【字義】 ○信、誠實で欺かないこと。○大車、牛^牛○輓、輓の兩端につけて牛をつける横木。○小車、馬車。○軌、馬をつける横木。

【義解】 「人にして信義をかくならば人として到底論ずるに足らない。譬へば牛車馬車に横木がない如くで、この横木がなければ車をやる事が出来ないと同じく、信義がなければ世に處し人と交はることが出来ないとはいはれた。

十世、雖百世可知也。

十張問ふ、十世知るべきやと。子曰く殷は夏の禮に因る、損益する所は殷の禮に因る、損益する所知るべきなり、其れ周を繼ぐもの知るべきなり。

○十世、天子姓をかへるを一世といふ、十代の革命の後をいふ。○つて六百年。○夏、禹王より始まつて四百年。○損益、損は減じ、益は加ふこと。○或、ある(有)。

【義解】 子張が十代後の政治は如何、前知し得べきかと尋ねたので、孔子前代の夏の時代の禮に大體因つて改める所は僅かであつた。周も亦前代殷のて改革する所は小部分にすぎなかつた。之を以て見れば百代の後と雖もかくあつて、忠孝五倫の道の如きは永世かはるなく、道や禮の大法はかはること

「あらう」と答へられた。

子曰、非其鬼而祭之諂也、見義不爲無勇也。

【讀方】 子曰く、其の鬼に非ずして之を祭るは、諂ふなり。義を見てせざるは勇なきなり。

【字義】 ○其鬼、鬼は人の神靈、其鬼は其の人の祖先の神靈。

【義解】 孔子曰く、其の人の當然祭るべき神靈に非ざる神靈を祭るのは、鬼神に諂つて福利を求めようとする心からである。又己が當然爲さねばならぬ義を目前に見ながら、それを爲さないのは卑怯な振舞である。即ち人の爲すべからざることを爲すべき事とを示したものである。

八佾第三

此篇すべて二十六章、禮樂のことを論ず。

孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也。

【讀方】 孔子季氏を謂ふ、八佾庭に舞はず、是を忍ぶべくんば孰をか忍ぶべらん。

【字義】 ○謂季氏、季氏は季孫氏、魯の卿大夫なれば陪臣、謂は批評する○八佾、庭佾は列。天子は八佾、諸侯は六佾、大夫は四佾、士は二佾を禮とする、八佾は八佾十四人である。魯は周公の後だから八佾の舞を許されたが季氏は大夫であるから、四佾でなければならぬに、八佾の舞を自分の家廟の前庭で舞はせた○忍、たえしのぶ、敢てなすこと。

【義解】 孔子が季氏を批評して言ふには、「陪臣の身でありながら天子の舞たる佾の舞を家廟の前で舞はせた。之をしも敢てなす僭亂の者ならば何事でもなすであらう。即ち國をうばひ君父を弑するに至るかも知れぬ」と申された。

三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆々、奚取於三家之堂。

八佾第三

【讀方】三家の者雍を以て徹す。子曰く、相くる維れ辟公天子の堂に取らん。

【字義】○三家、孟孫叔孫季孫をいふ、魯の三大夫○以雍徹、徹は、雍は周頌の雍の篇で、天子宗廟の祭に此の詩をうたつて俎豆(供物)を取りまけるのである○相、助くる○辟公、諸侯○穆々、深遠の貌○堂、廟堂。

【義解】魯の三家たる孟孫叔孫季孫の人々が祖先たる桓公の祭をなすに當つて天子が宗廟で歌ふ雍の歌を歌つて俎豆を下げた。孔子は之を評して、詩經雍篇に天子の祭には諸侯が之を助け天子の姿は穆々として奥ゆかしいとあるが、何とてかゝる尊嚴な詩を彼の陪臣たる身を以て歌ふことがあるものか、僭越至極である」と曰つた。

子曰、人而不仁如禮何、人而不仁、如樂何。

【讀方】子曰く、人にして仁ならざれば、禮を如何せん、人にして仁ならざれば樂を如何せん。

【義解】人にして仁の心がなければ禮儀があつても役に立たないも何の用をなさない。一種の虚飾にすぎない。何故となれば、禮は讓るを主とし、和やはらぐを主とするもので、此の讓和は仁に本づくものであるから、不仁になしても、それはたゞ形のみで虚禮虚樂たるに過ぎないのである。

林放問禮之本。子曰、大哉問、禮與其奢也寧儉、喪與其易也寧戚。

【讀方】林放禮の本を問ふ。子曰く大なる哉問や、禮は其の奢

よ、喪は其の易めんよりは寧ろ戚めよ。

【字義】○林放、姓は林、名は放、魯人○本、根本○易、葬式の

○戚、悲しむこと。

【義解】魯の人林放が禮の根本を問ふた、孔子は其の問が根本的なよい問であることを稱賛して、大なるかな問やといはれた。そして禮の本を説明さし、奢りをさはめるよりは寧ろ質素儉約なるがよい。又喪の場合に

度を十分にし儀式を盛にするよりも、寧ろ心から哀悼する方が禮にかなつてゐる。ち禮の本は形式にあらずして實質にあるのだと教へられた。

子曰、夷狄之有君、不如諸夏之亡也。

【讀方】 子曰く夷狄の君ある、諸夏の亡きが如くならず。

【字義】 ○夷狄、東夷北狄で野蠻人○諸夏、夏は大なりで自尊の稱、中國の諸侯を云ふこと、無きこと。

【義解】 孔子曰く、「夷狄は禮儀のない國であるが、猶君長があつて上下の別が明かであつて今日の中國が諸侯臣下皆僭亂し名分が著しく亂れてゐて君道のなきが如くではない」と。但し一説には不如を如かずと讀んで「夷狄の君有るも諸夏の亡きに如かず」として中國をほめた言と解するが、前後の關係上妥當でない。

▽季氏旅於泰山。子謂冉有曰女能助祭與。對曰不能。子曰、嗚呼曾謂泰山不如林放乎。
【讀方】 季氏泰山に旅す。子冉有に謂つて曰く、女能助祭あたはざるかと。對へて曰く、

能はず。子曰く嗚呼曾ち泰山は林放に如かずと謂ふか。

【字義】 ○旅、國に大凶災ある時に祭る祭の名○泰山、五嶽の一、齊魯の境にある○冉有、孔子の門人、姓は冉名は求、字は子有○女、なんぢ○曾、乃ちかへつての意。

【義解】 季氏が泰山に旅の祭を行はうとした。旅は諸侯の祭で大夫の爲すべきことでないのに孔子はその非禮を止めさせようとして、時に季氏に仕へてゐた門人の冉有に謂ふには「汝は救ふことが出来ないか」と、冉有は出来ないかと對へた。そこで孔子は歎息して「嗚呼神は非禮をうけるものでないのに、季氏は泰山をかの禮の本を問ふた林放にも如かないものと思つてゐるのか、情けないことである」とおつしやられた。蓋し冉有を勵まし、季氏を諷された言である。

子曰、君子無所爭、必也射乎、揖讓而升下、而飲。其爭也君子。

【讀方】 子曰く、君子は争ふ所なし。必ずや射か。揖讓して升下し、而して飲む。其争ひや君子なり。

【字義】 ○射、六藝の一、弓を射ること。○揖讓、揖は手を拱り頭を垂れて會釋すること、讓はゆづりあふこと。○升下、堂は升り下り。○而飲、負けた者が酒を飲む規定なり。

【義解】 孔子曰く「君子は謙遜で人と争ふやうなことはしない。しかし只一つ場合には勝負を争はねばならぬ。此の場合二人つつ堂に升つて射、二度まで、者が勝つ、終つて堂から下つて負けたものは罰杯をのませられる。しかしそに當つて揖讓といつて互に會釋し讓り合つて臂を奮ひ聲を厲ますやうな野卑なことはしない。その競争たるや實に君子の争で奥ゆかしいものである。」

子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何之謂也。子曰、繪事後素。曰禮後乎。子曰、起予者商也、始可與言詩已矣。

【讀方】 子夏問ふて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以絢となすとは何の謂ぞや。子曰く繪の事、素を後にす。曰く、禮は後乎と。子曰く、予を起す者は商なり、始め

て與に詩を言ふべきのみ。

【字義】 ○巧笑倩兮、倩はえくぼありて口もとの愛らしいこと、兮は置字、巧笑は上手に笑ふこと。○美目盼兮、盼は白眼と黒眼のはつきりすること、美しい目づかひして目元の美しいこと。○素、さび。○絢、色どりの美しいこと。○後素、素は白、種々の繪の具を用ひてから白粉で仕上げをする。○起予者、私を引き立てるもの。○商、子夏の名。

【義解】 子夏が巧笑倩たりの詩の義を尋ねた。此の詩は美人の麗質を歌つたもので、笑へば口元に愛嬌あり、目元美しく粉飾を用ひず天然のさびそのまゝの麗色が絢爛としてゐるの意であるが、孔子は繪の事に譬へて、繪畫はかき上げた後に更に更じ、目分と加へて洵飾するものであるといはれた。そこで子夏は疑問に思つて、さらかときかれた。その意味は中心に誠がなければ禮の形式が具つても何れ中心の誠である上に禮が加はつて文質かね具ることになる故に、禮は然との意である。孔子は之をきいて感歎して、予を引き起し予の氣のつよ

暗示してくれたのは商と汝である。與に詩經を論ずるに足るものであると賞賛さ。
△子曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮吾能言之、宋不足徵也、文獻不足故也、則吾能徵矣。

【讀方】 子曰く、夏の禮は吾れ能く之を言ふも、杞は徵とするに足らざるなり。殷の禮は吾れ能く之を言ふも、宋は徵とするに足らざるなり。文獻足らざるが故なり。

【字義】 ○杞、周代の國名、夏の後裔○宋、周代の國名、殷の後裔○徵、證とする○文獻、書物典故。

【義解】 私は夏の禮の事を知つてゐるが、確かなことを調べようとして夏の裔たる杞に行つたが、一も證據となるべきものがない。又私は殷の禮は知つてゐるが之亦確かな證左を持たぬから、殷の裔たる宋の國に行つて調べたが、やはり得る所はなかつた。それは書籍や典故やが足りない爲めであらう。若しもそれらがよく具はつて居れば

十分に證據だてるけれども、仕方のないものであると歎じられた。

子曰、禘自既灌而往者、吾不欲觀之矣。

【讀方】 子曰く、禘既に灌じてより往は、吾之を觀るを欲せず。

【字義】 ○禘、祭の名、天下に王たる者その始祖を祀る。周王の祭であるが魯は周公の後であるから特に之を行つた○灌、強い香酒を地にそそいで神降しの式を行ふこと○往、後、それから後は。

【義解】 禘の祭を行ふに當つて始めの内は魯の君臣も緊張して行ふが、灌の儀式をやつてからは漸く倦怠して觀るにたまないのである。綱紀の弛類、禮道の衰廢を歎じたのである。

或問禘之說。子曰、不知也、知其說者之於天下也、其如示諸斯乎。指其掌。

【讀方】 或ひと禘の說を問ふ。子曰知らざるなり、其の說を知る者の天下に於けるや、其れ諸れを斯に示すが如きかと、其の掌を指さす。

【字義】 ○不知也、孔子禘の説を知らざるに非ず、魯の天子に非ずしこの禮を僭するを憚りてかくいつたのである○如示諸斯、之を掌において視るが如く易いといふ意。

【義解】 或人が禘の意味を尋ねられた。孔子は禘は報本敬誠の心から出て天子が其の祖先を祀るものであることを十分承知してゐたが、魯が僭して行つてゐることを批難することになるのでわざと知らずと答へた。そして掌を指さして禘の説をよく知つてゐる者ならば、天下を治めること此の掌の上に物を見るが如く易いことであるといはれた。即ち報本敬忠の心を本として禮を行へば民徳厚きに歸して天下は治まる譯である。

祭如在、祭神如神在。子曰、吾不與祭、如不祭。

【讀方】 祭るには在すが如し、神を祭るは神在すが如しと。子曰く吾れ祭に與らざれば、祭らざるが如し。

【字義】 ○祭如在、父母祖先を祭るにその人々の姿がそこにあるやうに思ふ○祭神

山川の神をまつる。

【義解】 父母祖先の靈を祀るに先祖父母がそこにゐるやうな心地で祭り、山川の神を祭るにもそこに神が居るやうに思つて誠意を持つて祭るべきである。この古語を孔子が歎美して誠にその通りで、若しも祭りの場合に自分が用事病氣等の爲めに自らそれをしない時は、祭つたやうな心持がしないものである。蓋し祭には誠を盡すべきをいはれたのである。

王孫賈曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂也。子曰、不然、獲罪於天、無所禱也。

【讀方】 王孫賈問ふて曰く、其の奥に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びよとは何の謂をや。子曰く然らず、罪を天に獲れば、禱る所なし。

【字義】 ○王孫賈、衛の大夫名は賈○奥、室の西南隅で一家の最も尊い所、君主に譬ふ○竈、物を煮炊きする所、火を司る神、實権ある臣に譬ふ○禱、いのち。

【義解】 孔子が衛の國に居つた時、權臣王孫賈が諺を引いて問ふて曰く「奥に媚び

るよりは寧ろ竈に媚びよ、即ち衛君に禮を盡すよりも實權ある吾れに附隨する方が利益であらう」といつた。そこで孔子は曰く、「兩者ともいけない。人に媚びて利を得んとするは非禮である。天の神は非禮を惡む。若しも罪を天の神に得たならば如何に祈り求めても罪を免れる所はない。」

子曰、周監於二代、郁郁乎文哉、吾從周。

【讀方】 子曰く、周は二代に監みる、郁郁乎として文なるかな。吾は周に従はんとす。

【字義】 ○監、鑑み手本とする○二代、夏殷二代○郁郁乎、文盛に華やかなこと。

【義解】 孔子曰く周は夏殷二代禮樂を手本として其の長ととも短をすてて禮樂をこしらへた。故に周の禮樂制度は郁々として美事に華やかである。吾は周禮のよく整つてゐるのに従はう。

子入大廟、每事問。或曰、孰謂鄆人之子知禮乎、入大廟每事問。子聞之曰、是禮也。

【讀方】 子大廟に入つて事毎に問ふ。或ひと曰く、孰れか鄆人之子禮を知ると謂ふ。

か事毎に問ふと。子之を聞いて曰く、是れ禮なり。

【字義】 ○大廟、魯の周公の廟○鄆人之子、鄆は魯の邑名、孔子の父がこの邑の大夫であつたから、孔子を鄆人之子と呼ぶ。

【義解】 孔子が周公を祀つた大廟に入つて禮を手傳はれた時に、一々儀式のことを人に尋ねた。これを見た人が譏つていふには「鄆人之子は禮をよく知つてゐるといふ噂なのにどうしたのか」と嘲つた。孔子は之をきいて「禮は恭敬を本とする、儀式を人に問ふは謹慎の至りで、之が即ち禮にかなふ所以である」といはれた。

子曰、射不主皮、爲力不同科、古之道也。

【讀方】 子曰く、射は皮を主とせず、力科を同じうせざるが爲めなり。古の道なり。

【字義】 ○射不主皮、儀禮郷射篇にある句、射は弓を射る禮式、皮は的で、的を射ぬくことを目的とはしないの意○科、等階級のこと。

【義解】 儀禮に射は皮を主とせずといふ句があるが、射の道は禮を學ぶのが主目的

であるから、心正しく體具はることを主眼とするもので、従つて的に命中するかしな
 いかを試すもので、決して力強款的の皮を射通すことを主とするのではない。しかる
 に現今は古の禮法が廢れてひたすら力を競ふやうになつたのは歎かばしいことである。
 子貢欲去告朔之餼羊。子曰、賜也、爾愛其羊、我愛其禮。
 【讀方】 子貢告朔之餼羊を去らんと欲す。子曰く賜や、爾は其の羊を愛み、我は其
 の禮を愛む。

【字義】 ○告朔之餼羊、朔は曆、古は天子が十二月分の曆を諸侯に頒つと、諸侯は
 之を祖先の廟に納めて、月の朔日に一匹の羊を供へて廟に告げ、曆を國中に行ふ儀式
 をした。餼は生牲のこと○愛はをしむ○賜、子貢の名。

【義解】 魯では文公の時から告朔の禮を廢して只羊を供へる儀式だけをして居つた。
 そこで子貢は禮が廢れた以上、羊を犠牲にするも無益と考へて、之をもやめさせよう
 とした。その時孔子は、「賜よ、汝は羊を惜しむが私は羊を供へるだけでも禮の形が

残つてゐるから無いよりかましたと思つてゐる。私は費用よりか寧ろ禮全部を失ふこ
 とを惜しむものである。」といはれた。

子曰、事君盡禮、人以爲諂也。

【讀方】 子曰く君に事へて禮を盡すに、人以て諂へりとなす。

【義解】 孔子曰く、君に事へるには當然の禮儀を盡さねばならぬ筈である。然るに
 今は當然の禮をつくして君に仕へるのを以て、君にへつらひ媚びるのだと誤解するも
 のがある。禮の衰へたることを以てしてもわかることである。

定公問、君使臣、臣事君、如之何。孔子對曰、君使臣以禮、臣事君以忠。

【讀方】 定公問ふ、君臣を使ひ、臣君に事ふる之を如何と。孔子對へて曰く、
 を使ふに禮を以てし、臣君に事ふるに忠を以てす。

【字義】 ○定公、魯の君、名は宋。

【義解】 魯の定公が君が臣を使ひ、臣が君に事ふるの道を問はれた。孔子對へ

く「君が臣を使ふに禮儀を以てして臣の人格を尊重し、臣は又君に事ふるに忠誠をつくしていつはることなければ君臣和合するであらう。」

子曰、關雎樂而不淫、哀而不傷。

【讀方】 子曰く關雎は樂みて淫せず、哀みて傷らず。

【字義】 ○關雎、詩經國風の部の周南の首章、文王の宮人の作で、第一章に文王の爲めに好配偶を得んことを歌ひ、第二章に淑女を得ざる憂思を述べ（哀む）第三章に淑女を得て文王に配した喜を述べ（樂しむ）てゐる○淫、樂しむすぎて正しさを失ふ○傷、やぶる、哀みすぎて和を害す。

【善解】 孔子が詩の關雎の篇をほめて曰く、樂しんでしかも正を失ふに至らず、哀しんで和を害せず、中庸の節にあつたものは關雎の詩である。

哀公問社於宰我。宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、使民戰慄。子聞之曰、成事不說、遂事不諫、既往不咎。

【讀方】 哀公社を宰我に問ふ。宰我对へて曰く、夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす、曰く民をして戰慄せしむと。子之を聞いて曰く、成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず。

【字義】 ○社、土地の神、樹木を樹えて主とする○夏后氏、后は君即ち夏の君で禹王をいふ○戰栗、震ひ恐れる。

【善解】 魯の君哀公が孔子の門人宰我に社のことを尋ねられた。宰我は辯にまかせて曰く、夏では松を、殷では柏を、周では栗を植えて神木とされた。思ふに三者とも強くて成長のよい木であるが、周が特に栗を選ばれたのは民を戰慄させるため即ち慄はリツと讀んで恐れる意味を持つ字であるから、民をして刑罰に恐れしめるためでありませうと對へられた。孔子がこの事をお聞きになつて、既に成つたことは説いても及ばない。成しとげたことは諫めても役に立たない。過ぎたことは咎めても任方がないから、私は説かず諫めず咎めもしないが、餘りに牽強附會の辯を弄するものではな

いと戒められた。

子曰、管仲之器小哉、或曰、管仲儉乎曰管氏有三歸、官事不攝、焉得儉。然則管仲知禮乎。曰邦君樹塞門、管氏亦樹塞門、邦君爲兩君之好有反坫、管氏亦有反坫、管氏而知禮、孰不知禮。

【讀方】 子曰く、管仲の器は小なるかな。或ひと曰く、管仲儉なるかと。曰く管氏三歸あり、官事攝せず、焉んぞ儉なることを得ん。然らば則ち管仲禮を知るか。曰く邦君樹して門を塞ぐ、管氏亦樹して門を塞ぐ、邦君兩君の好を爲すに反坫あり、管氏亦反坫あり、管氏にして禮を知らば、孰か禮を知らざらんや。

【字義】 ○管仲、姓は管、姓、夷吾齊の大夫で桓公を助けて覇業を成さしめた人○器小、器量が小さい○三歸、臺の名○官事不攝、官の役を兼任させない即ち一人一職○邦君、國君○樹塞門、木をうゑて門内を見せないやうにする○好、よしみ○反坫、酒盃をおく臺。

【義解】 孔子が管仲を評して、彼は器量小なる人間よ、桓公を助けて覇をなさしめたけれども主として權謀術數を用ひて、仁義正道を以てしなかつたといはれた。そこで或人が管仲は然らば儉約な人ですかと質問した。孔子の答へに管仲は三歸の臺を作り官職に兼任を設けなかつたことを以てしても奢りの人であるといへる、どうして儉といふことが出来よう。するとその人がそんなら禮を知つてゐるのではありませんかと尋ねた。孔子曰く、諸侯は樹を植ゑて門を塞ぐことが出来るが、大夫には出来ない。それにも拘はらず管仲は樹して門を塞いだ。又國君は諸侯同志相親しむために反坫臺を持つものであるが、管仲は大夫の身分として僭越にも反坫を持つてゐた。若し管仲が禮儀を知つてゐる位なら、何人が禮を知らないといへるであらうかと。

子語魯大師樂曰、樂其可知也、始作翕如也、從之純如也、皦如也、繹如也、以成【讀方】 子魯の大師に樂を語つて曰く、樂は其れ知るべきなり、始め作るに翕如り、之を從ちて純如たり、皦如たり繹如たり、以て成る。

【字義】 ○大師、樂官の長○始作、奏し始めること○翕如、翕は合ふ、合整の貌○
從、縦と同じくはなつ○純如、純は和、諸音和合すること○噤如、噤は明、各音分明
な貌○繹如、繹は續、各音連續して絶えないこと○成、一段が終る。

【義解】 孔子が樂の衰廢を歎かれて、魯の音樂長に語り教へて曰く、樂の法は難か
しいものでない。始め奏する時は衆音ひとしく整一し、やがて各自盛に聲を放ちてし
かも相和し、和の中にも分明に各音色を發揮し、而して絶えずして連續する、かくし
て一曲を成し得るのである。

儀封人請見曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見也。從者見之。出曰、二三子何患於
喪乎、天下之無道也久矣、天將以夫子爲木鐸。

○【讀方】 儀の封人見えんことを請ふて曰く、君子の斯に至るや、吾未だ嘗て見ゆる
を得ずんばあらずと。從者之れを見えしむ。出でて曰く二三子何を喪ふを患へんや、
天下の道なきこと久し、天將に夫子を以て木鐸となさんとす。

【字義】 ○儀封人、衛の國の儀といふ邑を掌る官吏○斯、此の地○從者、孔子の從
者○見之、取次して此の人を孔子に見えさせた○二三子、隨從の門人を呼びかけた語
○喪、魯の大夫の位を喪ふこと○木鐸、鐸は鈴。銅又は鐵で作つたもので、軍事に用
ふるものはその臺も銅や鐵で作り、金鐸といひ、文事に用ふるものは木鐸といふ。政
教の觸れを出す時に振る鈴。

【義解】 孔子が魯の大夫の職を辭して衛の國へ行かれた時に儀といふ邑の役人が孔
子に面會を求められた。其の言に、私は有徳の君子が此地をすぎられる時必ず御面會
することにしてゐるといつたので、門人達が面會した。封人は孔子と話した後に席
を退いて門人に語つて曰く、君たちよ、何も夫子が大夫の位を喪つたとて心配するこ
とは少しもない。天下の亂れてゐること久しい。必ずや天は孔子を以て木鐸をなら
人として一世の人々を教化させるであらうと。

子謂韶、盡美矣、又盡善也。謂武、盡美矣、未盡善也。

【讀方】 子韶を謂ふ、美を盡せり、又善を盡せりと。武を謂つて曰く、美を盡せり、未だ善を盡さず。

【字義】 ○韶、帝舜の音樂の名○武、周の武王の音樂の名。

【義解】 孔子が舜の樂たる韶を批評して曰く、「音樂の調子といひ舞容といひ美しさを極め、又その中に寓した徳も善を盡してゐる。更に武王の樂たる武を評して曰く、「美は盡してゐるが徳に於て善を盡してゐるとはいはれない」と。蓋し舜は堯の禪をうけて天子となり、武王は殷を討つて天子となつたので徳の差が音樂にあらはれてゐるのであらう。

子曰、居上不寛、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉。

【讀方】 子曰く上に居て寛ならず、禮をなして敬せず、喪に臨んで哀まざれば吾何を以て之を觀んや。

【字義】 ○寛、ゆるやか、度量のある態度○臨喪、葬祭に臨むこと。

【義解】 人の上に立つ人は寛大にして衆を容れる度量がなければ、には恭敬の心がなければ虚禮であり、葬祭に臨んで眞實に哀悼しなば、若しも寛大ならず恭敬ならず、哀しまざれば私は觀るに足らぬ人といふ。

里仁第四

此の篇すべて二十六章

子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得知。

【讀方】 子曰く里は仁を美と爲す。擇んで仁に處らざれば、焉んぞ知を得ん。

【字義】 ○里、村里、二十五家を一里とす○處、居る。

【義解】 人が居住するには風俗仁厚醇美の所を擇んで住むのが知といふべきである。風俗がよくなければ惡風に染みて是非の本心を失ふに至る。即ち知者とはいへない。

子曰、不仁者不可以久處約、不可以長處樂、仁者安仁、知者利仁。

里仁第四。

【讀方】 子曰く、不仁者は以て久しく約に處るべからず、以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す。

【字義】 ○約、貧賤困窮の境遇。○樂、富貴裕福の境遇。

【義解】 不仁者は窮困の境遇に居れば悪い考を起し、富貴の境に居れば奢りに走つて本心を失ふ。仁者は仁に安んじ善をなすを樂しから、貧賤も意に介せず富貴も身を壞るに至らず、悠々としてそれらを超越してゐる。知者はその仁に安んずる境には達せられないが、仁を利用して富を失はない。

子曰く、惟仁者能好人、能惡人。

【讀方】 子曰く、惟仁者のみ能く人を好し、人を惡む。

【義解】 仁者は公平無私で義に明かであるから、利害に制せられず感情に走らず、よく人の善惡を見分けることが出来る。即ち仁者のみが人を賞め人を惡むことが出来るのである。

子曰く苟志於仁矣、無惡也。

【讀方】 子曰く苟くも仁に志せば、惡しきことなし。

【字義】 ○苟、かりそめにも。

【義解】 人が一旦仁に志さし、道德的向上に向つたならば、爲す所に惡むことがないであらう。

子曰く、富與貴是人之所欲也、不以其道得之、不處也。貧與賤是人之所惡也、不以其

道得之不去也。君子去仁惡乎成名、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。

【讀方】 子曰く、富と貴とは是れ人の欲する所なり。其の道を以て之を得ざれば處らざるなり。貧と賤とは是れ人の惡む所なり。其の道を以て之を得ざれば去る。君子仁を去つて惡にか名を成さん。君子は食を終るの間も仁に違ふことなし。次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是に於てす。

【字義】 ○惡、いづくにか○造次、至急の時○顛沛、まろび倒るる際○是、

す。

【義解】富貴は人の欲する所であるが、徳と功によつて富貴たらざれば富をあたかないで之を去る。貧賤は人の嫌がる所であるが、貧賤たるべき行をしてたのでなくとも、貧賤に安んじて去らない。君子はかくの如く富貴貧賤を超越したす道のため即仁に志ざしてゐる。若しも君子にして仁を去つたならば君子たる値がない。君子は食を終る間も、火急な場合も、失敗困頓の際も、此の仁から離れることは決してない。

子曰、我未見好仁者惡不仁者、好仁者無以尚之、無不仁者其爲仁矣、不使不仁者加乎其身。有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者、蓋有之矣、我未之見也。

①【讀方】子曰く、我れ未だ仁を好み不仁を惡む者を見ず、仁を好む者は決して之れに尚ふることなし、不仁を惡む者は其れ仁をなす、不仁者をして其の身に加へしめず。能く一日其の力を仁に用ふる有らん。我未だ力の足らざる者を見ず、蓋し之れ有らん。

我れ未だ之を見ざるなり。

【字義】 ○無以尚之、尚ほ加ふ、之れに増した行がない。

【義解】 孔子曰く、私はまだ眞に仁を好み不仁を惡む者を見ない。仁を好むは最上の徳で之れに何者も加へることは出来ないが、不仁を惡む者は其の次で仁をなし且つ不仁者をして不仁なる行を己が身にもちかけることを許さない。而して仁を好み不仁を惡むは、決して難事ではない。一日其の力を仁に用ふればそれでよい。私はまだ仁をなすに力の足りないといふ人を見ない、蓋しあるかも知れないが私はまだ知らない。思ふに仁をなす力が足りないのではなくて、仁を爲さうとしないのである。

子曰、人之過也、各於其黨、觀過斯知仁矣。

【讀方】 子曰く、人の過つや、各其の黨に於てす。過を觀て斯に仁を知る。

【字義】 ○黨、類、性質の異なる所

【義解】 人の過失を見るに性情の異なるによつて過失の類を異にする。譬へや

親切すぎて過ちを生じ、不仁者は輕薄にして過失をなす。故に其の過失を其の人の仁不仁を知ることが出来る。

子曰、朝聞道、夕死可矣。

【讀方】 子曰く、朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり。

【義解】 人は人たる道を知れば朝にきいて夕に死んでも遺憾はない。若しいも長命しても人たる道を知らねば禽獸と等しいのである。

子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

【讀方】 子曰く、士道に志し、而して惡衣惡食を恥づる者は、未だ與に議るにざるなり。

【義解】 道に志す所の士は衣食の如き外的欲求に對しては寧ろ無關心にして、我々内心の修養を努むべきである。然るに人に對して自己の惡衣惡食を恥づるでは、到底ともに語るに足らないものである。

子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。

【讀方】 子曰く、君子の天下に於けるや、適もなく、莫も無し、義と與に比む。

【字義】 ○適、厚い○莫、薄い○比、したしむ。

【義解】 君子の天下の人と交はるには、愛憎偏頗がない。故に自己の親しき人に向く、自己に疏き人を疏外するやうな事はなく、公平無私に義理によつて行動し、苟しくも道理に反したことはしない。

子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。

【讀方】 子曰く、君子は徳を懷ひ、小人は土を懷ふ。君子は刑を懷ひ、小人は懷ふ。

【字義】 ○懷、思ふ○土、己の身を安んずべき地○刑、法律のこと○惠、

【義解】 孔子曰く、君子は自己の徳が足りないで、刑罰の來らんことを人は身を安んずる地を承めて只自己一身の利益を思ふ。其の思念する所を

君子小人の別がわかる。

子曰、放於利而行、多怨。

【讀方】 子曰く、利に放りて行けば、怨多し。

【字義】 ○放、依る○怨、人から怨まれること。

【義解】 孔子曰く、人は義に依つて行動しなければならぬのであるが、己れの利益といふことを主としてのみ行へば、義に外れ道にそむいて、人から怨をうけることが多い。

子曰、能以禮讓爲國乎、何有。不能以禮讓爲國、如禮何。

【讀方】 子曰く、能く禮讓を以て國を爲めんか、何かあらん。禮讓を以て國を爲むること能はずんば、禮を如何。

【字義】 ○禮讓、人に讓ること○爲、治める○何有、たやすいことである○如禮何禮儀も効がない。

【義解】 子曰く、國を治めるに禮讓を以てすれば互に相讓りて争ふことがないから、世は自ら治まつて少しも困難を生ずることはない。之に反して禮讓を以て國を治めなければ禮の形式は具はつても虚文虚禮で實効がなく、従つて國もよく治まるわけにはいかないのである。

子曰、不患無位、患所以立。不患莫己知、求爲可知也。

【讀方】 子曰く、位無きを患へず、立つ所以を思ふ。己れを知らるることへず、知らるべきを爲すを求む。

【字義】 ○立、官位のある位置に立つ。

【義解】 普通の人には自分に官位のないことを心配するけれども、君子た無いことは心配しないで、そのかはりその地位に立つべき學術器識のある配する。又人から自己の力を知られることのないのを心配せずに、自己が配するための學業道德の實をあげることを心配する。かくすれば自然に人に知

を得た後も決して失敗することはないのである。

子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰唯。子出、門人問曰、何謂也。曾子曰、夫道忠恕而已矣。

【讀方】 子曰く、參や、吾が道一以て之を貫く。曾子曰く唯。子出づ、門人問う曰く、何の謂ぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。

【字義】 ○參乎、曾子の名、よびかけたのである○唯、はいといふこと○門人、子の門人○忠恕、忠は己の誠心を盡すこと、恕は人の身の上を思ひやること。

【義解】 孔子が曾子を呼びかけて曰ふに、參よ、私の道は多岐にわたつてゐるやうに見えるが、之を貫くに一を以てしてゐるのだと仰せられた。曾子は孔子の意を悟つてハイと答へただけであつた。孔子が家を出られたので、曾子の門人達は不審に思つて、一以て貫くとは如何なる意味かと尋ねた。そこで曾子の曰ふには、孔夫子の道は唯忠恕の一に歸する。忠は己が中心を盡し恕は人の上を思ひやることであつて、此の

忠恕の道が夫子の道の根柢をなすものであると教へられた。

子曰、君子喻於義小人喻於利。

【讀方】 子曰く、君子は義に喻り小人は利に喻る。

【字義】 ○喻、曉る心付く○利、私利。

【義解】 徳高き君子と私利に汲々たる小人とは、同一の言をきき同一の物を見ても心のつき方悟り方が違つてゐる。君子は義の方に悟り、小人は利益の方に悟る。昔柳下惠といふ君子は飴を見て、老人を養ふに宜しからうと曰ひ、盜跖といふ悪人は、鍵に黏するに宜しと曰つたといふことである。此の話の如く君子と小人の心の用ひ方は異なるものである。

子曰、見賢思齊焉、見不賢而内自省也。

【讀方】 子曰く、賢を見れば齊しからんことを思ひ、不賢を見れば内に自ら省みるなり。

【義解】 賢者を見れば賢者と其の徳を齊しくせんと思ひ、不賢者を見ては其の醜汚を恥ぢて自分にもそのやうな悪行はないかと反省する。かくして善に進み悪を去るの工夫は人間修養上の重大なる工夫である。

子曰、事父母幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨。

【讀方】 子曰く、父母に事へて幾く諫む、志の從はざるを見れば、又敬して違はず、勞して怨みず。

【字義】 ○幾諫 微なり、物柔らかに異見をいふ。

【義解】 父母に事ふるの道は、父母の過ある場合も氣に逆はぬやうに物柔らかに諫めるがよい。そして父母が尙その非を改めないのなら、やむを得ず尊敬の心をつくして父母の心に違はず、又父母のために己が心を勞するとも怨みかこたないやうにするのである。

子曰、父母在、不遠遊、遊必有方。

【讀方】 子曰く、父母在はば、遠く遊ばず、遊ぶに必ず方あり。

【字義】 ○方、方角、自己の行く方角を告げること○遊、遊學遊歴のこと。

【義解】 孔子のいふには、父母の存生中は子たる者は成るべく父母の膝下を離れず、に孝養を盡すべきであつて、若しやむを得ずして遠く離れるやうな時には、必ず行く先を告げて父母を安心させ、又父母から呼ばれた時には直ちに歸れるやうにしておくべきである。

子曰、三年無改於父之道、可謂孝矣。

學而篇に出てゐる。

子曰、父母之年不可不知也。一則以喜、一則以懼。

【讀方】 子曰く、父母の年は知らざるべからず。一は則ち以て喜び、一は則ち以て懼る。

【義解】 父母の年はよく記憶してあかねばならぬ。それは一には父母の年とつて尙

健康であることを喜び、又一方に父母が年々に衰へて行くことを心配に思つて懼れまづかふためである。

子曰、古者言之不出、恥躬之不逮也。

【讀方】 子曰く、古の者言を之れ出さざるは、躬の逮ばざるを恥ぢてなり。

【字義】 ○古者、古人○躬、身、躬行○逮、及ぶ。

【義解】 古人が言論を慎しんだのは、言論と實行とが伴はないこと即ち躬自ら行ふことが言ふことに及ばないことを恥ぢてしたのである。然るに今の人はみだりに放言して恥づるを知らないのは宜しく古人を顧みて言を慎しむべきである。

子曰、以約失之者鮮矣。

【讀方】 子曰く、約を以て之を失ふ者は鮮し。

【字義】 ○約、萬事控を目にする事、放漫の反對。

【義解】 萬事控を目にして放漫に流れないやうにすれば過失が少いであらう。

子曰君子欲訥於言而敏於行。

【讀方】 子曰く、君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す。

【字義】 ○訥、言葉の遅き事○敏、疾くすみやかに。

【義解】 君子たる人は言論よりも躬行を尊ぶ。だから言には寧ろ訥ならんことを欲する。しかし實行に於ては敏捷ならんことをつとめるのである。

子曰、德不孤、必有隣。

【讀方】 子曰く、徳孤ならず、必ず隣あり。

【字義】 ○孤、獨り、孤立すること。

【義解】 身に徳ある人は孤立になつて人から排斥せられることはない。徳を好み道に志さす人があつて、家に隣家あるが如く、相扶け相親しんで、である。

子游曰、事君數斯辱矣、朋友數斯疏矣。

【讀方】 子游曰く、君に事へて數すれば斯に辱めらる。朋友に數すれば斯に疏ぜらる。

【字義】 ○數、度に過ぎて親密なこと、しばしばと訓ず○疏、うとんず。

【義解】 子游の曰く、君に事ふるにも朋友に交はるにも、餘りに狎れすぎて親密なのはよくない。君に狎れすぎれば反つて辱しめをうけ、朋友に狎れ親しめば反つてうるさいと疏外されるに至るであらう。

公治長第五

此の篇は概ね古人今人の賢否得失を論ず、凡べて二十七章

子謂公治長、可妻也、雖在縲紲之中、非其罪也。以其子妻之。子謂南容、邦有道不廢、邦無道免於刑戮、以其兄之子妻之。

【讀方】 子公治長を謂ふ、妻すべきなり、縲紲の中に在りと雖も、其の罪に非ざる

なりと。其の子を以て之を妻す。子南容を謂ふ、邦道あれば廢てられず、邦道無ければ刑戮を免かれんと。其の兄の子を以て之を妻す。

【字義】 ○公治長孔子の門人、姓は公治、名は長○謂、批評すること○妻、配して妻とする○縲紲、縲は黒い繩、紲はつなぐこと、古は獄に罪人を繋ぐに黒繩を以てして、牢獄にいられること○南容、孔子の門人、姓は南、名は容、字は子容、魯の大

夫孟懿子の兄○不廢、すてられない、用ひられること○刑戮、刑罰殺戮。

【義解】 孔子が公治長を品評して曰ふに、我が女を與へてよい人物である。今は牢獄にあつて縲紲の恥をうけてゐるが、それは實際ののではなくて冤罪である、といつて、自分の女を以て配偶とした。又南容を批評していふには、彼れは君子人であるから邦に道があり明君上にある時は用ひられて相當の地位を得、邦亂れて道の立たない時は、刑罰にかかつて殺戮されるやうなことはないであらう、といつて、兄の女を以て配偶者とした。



子謂子賤、君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯。

【讀方】 子子賤を謂ふ、君子なるかな若くの如き人、魯に君子者なくんば、斯れ焉にか斯れを取らん。

【字義】 ○子賤、孔子の門人、姓は宓、名は不齊魯の人○若人、かくの如き人。

【義解】 孔子が子賤をほめて曰ふに、君子なるかなこの人よ、しかし子賤の如き君子人の出たといふことは、魯の國に君子人が多くあるために、しらすく徳化をうけてかくの如き徳を成就したのであらうと。

子貢問曰、賜也何如。子曰、女器也。曰何器也。曰、瑚璉也。

【讀方】 子貢問ふて曰く、賜や何如と。子曰く、女は器なり。曰く何の器ぞや。曰く、瑚璉なり。

【字義】 ○賜、子貢の名○女器也、女は汝、器は器物で物の役に立つ有用の材であるとの意○瑚璉、宗廟の祭に用ふる器の名、夏では瑚といひ、殷では璉といひ、周では篋篋といつて、珠をもつて飾つた貴重な器である。

【義解】 子貢が問ふには、「私はどんな人物ですか」と。孔子の曰ふに「汝は器有用の材である」と。そこで子貢は重ねて「どんな器ですか」と尋ねた。孔子の曰ふに「瑚璉といつて宗廟に用ひる重器である」と。蓋し一面に子貢の人材であること稱揚すると共に、未だ君子は不器の域にまで達しないのを誡められたのであらう。

或曰、雍也、仁而不佞。子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞。

【讀方】 或ひと曰く雍や仁にして佞ならずと。子曰く焉んぞ佞を用ひん、人に禦るに口給を以てすれば、屢人に憎まる、其の仁を知らず、焉んぞ佞を用ひん。

【字義】 ○雍、姓は冉、名は雍、字は仲弓、徳行を以て稱せらる○佞、口に言ひまはすこと○禦、あたる、應對すること○口給、辯才。

【義解】 或人が冉雍を評して「仁者だけれども上手に物をいひまはす辯才といつた。そこで孔子の曰ふは、「佞などいふ辯才は必要のないことである

對するに辯才を以て口まめに抗論辯解すればかへつて人に憎まれる。冉雍は仁者であるどうかは知らないが、辯才に巧みでないことは決して疵にはならぬ」とおつしやつた。

子使漆雕開仕、對曰、吾斯之未能信。子說。

【讀方】 子漆雕開をして仕へしむ、對へて曰く、吾れ斯れ之れを信ずる能はず。子悦ぶ。

【字義】 ○漆雕開、孔子の門人、姓は漆雕、名は開字は子若○說、よろこぶ。

【義解】 孔子が門人の漆雕開に出で官に仕へたらよからうと勧められると、開は對へて曰ふに、私はまだ仕へて必ず其の職責を全うし得るかどうかを信ずることが出来ない、それほど淺學不才の者であるから、官途につくことはまだ早い」といつて辭退した。そこで孔子はその小成に安んぜず、學に篤きことを説かれた。

子曰、道不行、乘桴浮于海、從我者其由與、子路聞之喜。子曰、由也好勇過我、無

所取材。

【讀方】 子曰く、道行はれず、桴に乗つて海に浮ばん、我に従ふ者は其れ由かと。子路之を聞いて喜ぶ。子曰く、由や勇を好むこと我に過ぎたり、取り材る所なし。

【字義】 ○桴、筏○由、子路の名無名○取材、二説あり、取り材るとよんで、事理を裁度し取捨する智の乏しいことと解する説と、材を取る所なしとよみて、桴に用ひる材木を得ることが出来ないといふ説とある。今は前説に従ふ。

【義解】 孔子が當時の世を嘆じて曰く、自分の道は行はれないでは世は無道亂離、禽獸と行を等しくしてゐる。かかる亂世を見るよりは桴を浮べて遠く海外に遊ばうかと思ふ。そしてその時私に従つて行くべき勇者は由一人であらうといはれた。それを聞いた子路は大いに喜んだ。そこで孔子は子路があまり卒直で分別のないのを戒めていふには、汝の勇を好むのは私に過ぎてゐる。しかしあまりに勇にはやつて冷靜に事理を裁量するの智に乏しいといはれた。

孟武伯問、子路仁乎、子曰不知也、又問。子曰、由也、千乘之國可使治其賦也、不知其仁也。求也何如、子曰、求也、千室之邑、百乘之家、可使爲之宰也、不知其仁也。赤也何如、子曰、赤也、束帶立於朝、可使與賓客言也、不知其仁也、

【讀方】 孟武伯問ふ。子路仁なりやと。子曰く知らざるなり。又問ふ。子曰く、由や千乗の國、其の賦を治めしむべし、其の仁を知らざるなり。求や何如。子曰く、求や千室の邑、百乗の家、之が宰たらしむべし、其の仁を知らざるなり。赤や何如。子曰く、赤や束帶して朝に立てば、賓客と言はしむべし、其の仁を知らざるなり。

【字義】 ○賦、古は軍兵を賦課して出させた、故に兵事を賦といふ○求、冉有の名○千室之邑、千戸の村○百乘、卿大夫の家○宰、邑の代官家の執事○赤、姓は公西、名は赤、字は子華、孔子の門人○束帶、禮服をさること。

【義解】 魯の大夫孟武伯が子路は仁徳ある人かと尋ねた。孔子はそれはわからぬと答へた。すると強いて又尋ねたので答へて曰く「子路は勇を好む者で、千乗の大將侯

に仕へて兵事を掌らしめたならばよくその任を盡すであらう。しかし仁の徳は之を許すことは出来ぬ」と。そこで冉有は如何と問うた。孔子曰く「冉有は事務に長じ、ゐるので、千戸の邑の長となり、卿大夫の家の執事となつて、邑や家を管理させたならば理想的である。しかし未だ仁徳を以て許すことは出来ぬ」と。然らば公西赤は如何と問ふた。答へて曰く「子華は禮儀を心得た者であるから、禮装をさせて朝廷に立たせ諸國からの賓客と應對させたならば適當な人物であらう。しかし仁徳を以て許すことは出来ぬ」と。

子謂子貢曰、女與回也孰愈。對曰賜也何敢望回、回也聞一以知十、賜也聞一以知二。子曰、弗如也、吾與女弗如也。

【讀方】 子子貢に謂つて曰く、汝と回孰か愈れる。對へて曰く、賜や回を望まん、回や一を聞いて十を知り、賜や一を聞いて二を知る。子曰くしかざるなり吾れと女孰か愈れる。

【字義】 ○回、顔回○愈、まさる(勝)○吾與女弗如也、私も汝も共になはぬ。但し「吾々に如かざるを與す」と訓する人もある。今前者を妥當と認めてそれに従ふ。

【義解】 孔子が子貢にいふに、汝と顔回とどちらが勝れてゐるか。子貢曰く、私は到底顔回と同じに見られることは出来ない。回は睿明にして一を聞けば十を悟る俊才であるが私は僅か一をさいて二を知るに過ぎない、とても比較にはなりません。孔子は子貢が自らを知るの明あるをばほめて、回の勝れてゐることは獨り女が敵しなればかりではなく、私も及ばないのだといはれた。

宰予晝寢。子曰、朽木不可雕也、糞土之牆不可墾也。於予與何誅。

【讀方】 宰予晝寢ねたり子曰く朽ちたる木は雕るべからず糞土の牆は朽るべからず、予に於てか何ぞ誅めんや。

【字義】 ○雕、彫ること○糞土之牆、性のぬけた粘りけのない土で造つて土塼○斲、鏝でぬる○誅、責める。

【義解】 門人宰予が晝寢をした。孔子が氣力のない怠慢なことを評して曰く「朽木は彫り物にならないし、ぼろ／＼の壁は塗つても無駄である。汝がそんな考なれば何といつて責めても無駄であるから何にもいはない」といつた。蓋し宰予の怠慢戒めて根本的にその改心をうながしたものである。

子曰、始吾於人也、聽其言而信其行、今吾於人也、聽其言而觀其行。於予與改。【讀方】 子曰く、始めは吾れ人に於けるや、其の言を聽いて其の行を信ず、今は

れ人に於けるや、其の言を聽いて其の行を觀る。予に於てか是を改む。【義解】 私は前には人に對するに、其の言ふ所をさいて、直ちにさうであらうと思つて其の人の行も信じてゐた。しかし今日では其の人のいふことを聽いた上に其の行をよく觀て言行一致するか否かをしらべて後にすることにした。これといふは宰予が其の言ふ所が立派で行ふ所が之れに伴はないことから、かく改めるやうになつたのである。

子曰、吾未見剛者。或對曰、申根。子曰、根也慾、焉得剛。

【讀方】 子曰吾れ未だ剛者を見ずと。或ひと對へて曰く、申根と。子曰く、根や慾なり、焉んぞ剛を得んや。

【字義】 ○剛、物に屈せぬ剛氣○申根、孔子の門人、姓は申名は根

【義解】 孔子が義を執りて如何なるものにも屈撓しない剛者を見たことはないと思はれたので、或人が申根は剛者でせうと對へた。そこで孔子の曰はく、根は多慾の人であつて、一見剛直で孳々として勉め、身を殺しても顧みないやうではあるが、それは義によつてするのではなく、慾を以つて主としてゐる。故に一旦富貴を以て誘へば挫屈に甘んずるであらう。慾を求め利を主とするものが何で剛者たることが出来ようか。

子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人。子曰、賜也非爾所及也。

【讀方】 子貢曰く、我人の諸を我に加ふるを欲せざることは、吾れも亦諸を人に加

ふる無からんと欲すと。子曰く賜が爾の及ぶ所に非ざるなり。

【義解】 子貢の曰ふには、人が私に向つてすることと私の好まないことは、人もやはり好まないだらうと思つて、私もこれを人に曰つて施さないやうにしたいものである。孔子が之をきかれて、それは仁の極致忠恕の道で汝の力では及ばないことであらうと申された。

子貢曰、夫子之文章、可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞也。

【讀方】 子貢曰く、夫子の文章は、得て聞くことを得べし。夫子の性と天道と言ふは得て聞く可からざるなり。

【字義】 ○文章、詩書及禮について孔子の言○性、人の天から享けて生るる所の者○天道、天然自然の道理、日月の遊行四時の循環、吉凶禍福の類。

【義解】 子貢曰く、孔子先生の詩書禮等についての説はきくことが出来るけれども、性と天道については容易にきくことが出来ない。蓋し孔子は日常の必要なる

實際道徳をとき、實務に遠く且つ誤りて傳へられ易い、性と天道論はあまり説かなかつたからである。

子路有聞、未之能行、唯恐有聞。

【讀方】 子路聞くことありて、未だ之を行ふ能はざれば、唯聞くことあらんことを恐る。

【義解】 子路は孔子から聞いた事で、未だ自分に實行の出來ないことがあれば、その上にまた別のことを聞くことを恐れてゐるやうに見える。それ程實行に努めて、ひたすら行の及ばざることを心配してゐる篤實な様を言つたものである。

子貢問曰、孔文子何以謂之文也。子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也。

【讀方】 子貢問ふて曰く、孔文子は何を以て之を文と謂ふか。子曰く、敏にして學を好み、下問を恥ぢず、是を以て之を文と謂ふなり。

【字義】 ○孔文子、衛の大夫、姓は孔名は圉、文子は諡○下問、下の者に物を問ふこと。

と。

【義解】 子貢が問うて曰ふには、衛の大夫孔圉は行の修まらない人であるのに其の諡が文といふのは少しよすぎはしないかと。孔子の曰く、孔圉は鋭敏にして學を好み、且つ身分の低い者に問ふを恥ぢとしなかつた。とかく鋭敏なものは學を好まず、位の高い者は下問を恥ぢるものであるが、孔圉はさうでなく眞に學を好むの士であつたから文といふ諡を得たのである。

子謂子産、有君子之道四焉。其行己也恭、其事上也敬、其養民也惠、其使民也義。

【讀方】 子、子産を謂ふ。君子の道四あり。其の己を行ふや恭其上に事ふるや敬、其の民を養ふや惠、其の民を使ふや義。

【字義】 ○子産、鄭の大夫公孫僑。

【義解】 孔子が鄭の子産を批評して曰く、彼は君子の道に合ふ行が四つあり。其の身の行は恭儉にして驕らず、君に事へるに尊敬の心を盡し、人民には惠を施し、民を

國家の賦役に使ふに義理を主として公平である。

子曰、晏平仲與人交。久而敬之。

【讀方】 子曰く、晏平仲善く人と交はる。久しうて之を敬す。

【字義】 ○晏平仲、齊の大夫、姓は晏、名は嬰、字は仲、平は諡。

【義解】 孔子曰く、人の交はりは久しくなれば相狎れて敬を失ひ勝ちのものであるが、齊の大夫晏嬰はよく人と交はり久しくなつても、其の人を敬すること始めと少しもかはりがない。

子曰、臧文仲居蔡、山節、藻稅、如何其知也。

【讀方】 子曰く、臧文仲蔡を居き、節を山にし、稅を藻く、如何ぞ其れ知ならん。

【字義】 ○臧文仲、魯の大夫。名は辰○居蔡、居はちく、蔡は地名であるが、昔こゝから大龜を出したので、遂に龜の名となつた○山節、節は柱頭の斗拱、之を山形に刻ひこと、子の廟に限られる○藻稅、藻は草の模様をかくこと、稅は梁の上の短柱。

【義解】 孔子曰く、魯の大夫臧文仲は知者だと世人は評するが、彼は大夫の身分ゝゝながら、諸侯のするやうに蔡を家廟の中に置いて吉凶を卜する用に供し、又柱頭料拱に山形を彫み、梁上の短柱に藻の繪をかく等天子の宗廟に用ひる制を自分の家ゝに用ひた。之等は禮を犯し上を僭した非行であつて、これをしも知ある人といふことが出来やうか。

子張曰、令尹子文三仕爲令尹、無喜色、三已之無愠色、舊令尹之政必以告新令尹、何如。子曰忠矣。曰仁矣乎。曰未知焉得仁。崔子弑齊君、陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、則曰、猶吾大夫崔子也。之一邦、則又曰、猶吾大夫崔子也。違之、何如。子曰清矣。曰仁矣乎。曰未知焉得仁。

【讀方】 子張曰く、令尹子文三たび仕へて令尹となつて喜色無し、三たび已らるゝて愠色無し、舊令尹の政は必ず以て新令尹に告ぐ、何如と。子曰く、忠なり。曰く仁なりや。曰く未だ焉に仁を得るを知らず。崔子齊の君を弑す、陳文子馬十乘あり、

てて之を違る。他邦に至りて則ち曰く、猶ほ吾が大夫崔子すいしが如しと、之を違る。一邦に之ゆいて則ち又曰く、猶ほ吾が大夫崔子の如しと、之を違る、何如と。子曰く、清し曰く、仁なりや。曰く、未だ焉こゝに仁を得るを知らず。

【字義】 ○令尹、楚の官名、家老の役 ○子文、姓は鬬名は穀とら於菟と子文は字 ○已、やめる ○慍色、不平な顔色 ○未知焉得仁未だ焉こゝに仁を得ずとよむがよい ○崔子、齊の大夫崔は姓、名は杼 ○齊君、莊公 ○陳文子、齊の大夫、姓は陳、名は須無 ○馬十乘馬四匹を、一乘、十乗で四十四匹、大いに富んだ家 ○違、去る ○之、ゆく。

【義解】 子張が問うて曰く、楚の令尹子文は三たび令尹の職について格別喜ぶ色なく、三たび職を罷められて怨んだ様子もなく、舊令尹即ち自分の取扱つてゐた政治を新令尹に告げて引繼をした。一身の利害を忘れて國家に奉仕する彼の如きは如何なる人物であるかと。孔子の曰く、忠なる士であると。子張は更に仁といつてもよいかと尋ねた。そこで孔子はその一事のみを以て仁を得てゐるかどうかを知ることが出来な

いと暗に否定せられた。そこで子張は齊の大夫陳文子のことを語つて曰く、齊の大夫崔杼がその君莊公を弑した時に、陳文子は馬十乗を出す程富んだ家棄てて、悪人と同列するを恥ぢて國を去つた。文子は別の國へ行つたがやはりその國の大夫が君主を犯すのを見て、これも崔子の流であるといつて去つた。又外の國へ行つたがやはり同様なので、そこを去つたといふ如何なる人物でありますかと尋ねた。孔子は清廉せいれんな人物であるといつた。仁者といへますかとの重ねての間に、此の一事を以て仁徳を得た人といふことは出来ないかと答へられた。

季文子三思而後行。子聞之曰、再斯可矣。

【讀方】 季文子きぶんし三たび思ひて而して後行のちかたふ。子之を聞いて曰く、再びせば斯こゝれ可ならん。

【字義】 ○季文子、魯の大夫、季孫氏、名は行文。

【義解】 季文子は考へ深い人で三度も思案した後に實行された。しかしあまり考へ

過ぎて決断けつだんに乏しい憾みがあつた。そこで孔子は之を聞いて曰ふには、あまりに思案に過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しであるから、再び考へる位でよからうといはれた。

子曰、甯武子邦有道則知、邦無道則愚、其知可及也、其愚不可及也。

【讀方】 子曰く、甯武子邦道あれば則ち知なり、邦道無ければ則ち愚なり、其の知は及ぶべきなり、其の愚は及ぶべからざるなり。

【字義】 ○甯武子、衛の大夫、姓は甯、名は兪○知、智なり。

【義解】 孔子が衛の大夫甯武子を評して曰く、彼は明君上にあり政が正しい時は、知を出して國家を治めて智者の名を得、暗君上にあり政亂るれば隠れて愚人の如くにしてゐる。その智はまねることは出来るが、其の愚人の如くすることは私の及ぶ所ではない。

子在陳、曰、歸與歸與、吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之。

【讀方】 子在陳に在り、曰く、歸らんかな歸らんかな、吾黨の小子狂簡にして、斐然

として章を成せども、之を裁する所以を知らず。

【字義】 ○陳、國名○吾黨之小子、魯國にある門人○狂簡、志高遠なれど世事に疏いこと○斐然、文彩ある貌○成章、美しいあやもやうをなす即ち政事禮樂の燦然たること○裁、切り盛りすること。

【義解】 孔子が亂世を救はんとして諸國を遍歴されて陳の國に至つたが、道の行ふべからざるを見て長歎息して曰く、最早歸りませう、歸りて吾郷黨に残しておいた門弟達は教養しなければならぬ。彼等は志は高遠に持つてゐるが世事に疏く、學問文章は燦然として見るべきものがあるが、實際的の運用に至つては未だ十分でない。故に私は早く歸つて彼等を教導しなければならぬ。

子曰、伯夷叔齊不念舊惡、怨是用希。

【讀方】 子曰く、伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨是を用て希なり。

【字義】 ○伯夷叔齊、孤竹の君の二子、互に家督を譲りあつた人々で、武王の殷を討

つを諫め、用ひられないで首陽山に餓死した賢人○念、思ひ出す○用、以て○布、稀。

【義解】 伯夷叔齊は狷介の君子であつたから、度量の狭い人と思はれるが、二人はたゞ悪を惡むだけであつて其人を惡まず、その人が惡を改めれば決して舊惡を思ひ出さないやうな度量の廣い人であつた。故に人に怨まれることも稀であつた。

子曰、孰謂微生高直。成乞醢焉。乞諸其隣而與之。

【讀方】 子曰く、孰か微生高を直なりと謂ふ。或ひと醢を乞ふ。諸を其の隣に乞ふて之を與ふ。

【字義】 ○微生高、姓は微生、名は高、魯の人○醢、酢のこと。

【義解】 孔子曰く、微生高は正直との噂があるが、果して彼は正直であらうか。或人が醢を求めた時に、高は自分の家にないので竊かに隣家から貰ひうけて自分のものやうにして與へた。意を曲げ實を蔽ふことかくの如くで直といふことは出來ないではないか。

子曰、巧言令色足恭、左丘明恥之、丘亦恥之。匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥之。

【讀方】 子曰く、巧言令色足恭ならば、左丘明之を恥づ、丘亦た之を恥づ。怨を匿して其の人を友とするは、左丘明之を恥づ、丘亦た之を恥づ。

【字義】 ○足恭、足は過ぐることに、恭に過ぎて卑劣に陥る○左丘明、魯の太史、春秋傳を著はした人、或は別人ともいふ。

【義解】 孔子曰く、言葉をわざと巧みにし、顔色をしひて飾り禮にすぎて卑窟なるは、左丘明が之を卑陋なりとして之を恥ぢたが、私も亦それを恥づる。心に怨みふくむ所ありてしかも表而其の人と親交なるが如く見せかけるのは、左丘明の恥ぢた所で私も亦卑しいとする所のものである。

顔淵季路侍、子曰、盍各言爾志。子路曰、願車馬衣輕裘與朋友共敝之而無

曰、願無伐善、無施勞。子路曰、願聞子之志。子曰、老者安之朋友信之少

【讀方】 顔淵季路侍す、子曰く、盍んぞ各爾が志を言はざる。子路曰く、

車馬、輕裘を衣て、朋友と共にし、之を敝るも憾なけん。顔淵曰く、願はくは善に伐ることならん、勞を施すことなからん。子路曰く、願はくは子の志を聞かん。子曰く、老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん。

【字義】 ○季路、子路のこと○侍、孔子の側に在ること○蓋、なんぞ—さる○車馬衣輕裘、車馬にのり、軽く暖かな獸の皮をきる○敝之、破損する○伐、ほこる○無施勞、己の骨折を人にかづけけないこと。

【義解】 顔淵と子路が孔子の側に居つた時に、孔子が各汝等の志し願ふ所をいへといはれた。そこで子路の曰く、車馬に乗り輕裘を着、朋友と之を共にし、破損されても少しも遺憾のないやうにありたいと。顔淵の曰く、私は自己の善行を誇ることなく、自己の仕事は自己に服して他人をわづらはさないやうにしたいと對へた。子路はしからば夫子のお考はと尋ねると、孔子曰く、老人は之を安んじ、朋友は信じあひ、幼いものは愛撫してやりたいものであると。

子曰、已矣乎、吾未見能見其過而内自訟者也。

【讀方】 子曰く、已ぬるかな、吾れ未だ能く其の過を見て、内に自ら訟むる者を見ず。

【字義】 ○已矣乎、困つたものよと歎息すること○訟、責めること。

【義解】 孔子曰く、困つたことよ、私はまだ自己の過失を見て自ら自己を責め悔める人を多く見かけない。それほど世には過を悔める人が少いものであると歎じられた。子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。

【讀方】 子曰く、十室の邑、必ず忠信丘の如き者あらん。丘の學を好むに如かざるなり。

【字義】 ○十室之邑、一村十戸位の邑○忠信、忠は誠信は信實。

【義解】 孔子曰く、一邑十戸位の小邑にも資性美しき忠信の徳を具へた丘の如き者がある筈である。唯私が得難きを學んで倦まないことに如かないので、學を好んで學

んで倦まなければ必ず私と等しくなるであらう。

雍也第六

此の篇すべて二十八章

子曰、雍也可使南面。仲弓問子桑伯子。子曰、可也簡。仲弓曰、居敬而行簡、以臨其民不亦可乎、居簡而行簡、無乃大簡乎。子曰、雍之言然。

【讀方】 子曰く、雍や南面せしむべし。仲弓子桑伯子を問ふ。子曰く、可なり。簡なり。仲弓曰く、敬に居て簡を行ひ、以て其の民に臨まば亦た可ならずや、簡に居て簡を行ふ、乃ち大簡なること無からんや。子曰く、雍の言然り。

【字義】 ○雍、仲弓のこと○南面、人君政をきく位○子桑伯子、魯の人説苑に「孔子子伯子を見しに伯子衣冠せずして居る、弟子怪しみて曰く、夫子何爲ぞ此の如き人を見るやと、子曰く其質美にして文なし、吾將に説きて之を文にせんとす」とある人

と同人ならん○可也簡、南面せしむべし、簡素で煩雜でないからといふ義。

【義解】 孔子が再雍の人物を評して南面して國政を聽かしてもよい人材であるといはれた。或時仲弓（再雍）が子桑伯子は南面せしむべき人かと尋ねたから、孔子はよろしい、簡素にして政をなすに適するといはれた。そこで仲弓曰く、敬肅に身を持して民に臨むには簡易な政を以てするがよいのではないか。若し身を持するに簡政を行ふにも簡なれば、放縱に流れて大簡に失するではなからうかといつた。孔子それをきかれて仲弓の言葉通りであるとあつしやつた。

哀公問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回者、好學不遷怒、不貳過、不幸短命、今也則亡、未聞好學者也。

【讀方】 哀公問ふ、弟子孰か學を好むと爲す。孔子對へて曰く、顔回なり。好學を好む、怒を遷さず、過を貳ひせず、不幸短命にして死す、今は則ち未だ好學者を聞かざるなり。

【字義】 ○不遷怒、怒りを他にうつさない○亡、無し今日は此の世

【義解】 哀公が弟子の中で孰か最も學問を好まれるかと尋ねた。孔子は顔回といふ者がありましたが、この者は心掛のよい男で、怒を人に移さず、度としないやうに注意してゐましたが不幸にして三十二の短命で死にました。は此の世にありません。それで回が死んでから彼れにまざる好學の人を見せられた。

子華使於齊、冉子爲其母請粟。子曰、與之釜、請益。曰、與之庾。冉子與之粟九百。辭。子曰、母、以與爾隣里鄉黨乎。

【讀方】 子華齊に使す、冉子其の母の爲めに粟を請ふ。子曰く、之に釜を與へよ。益さんことを請ふ。曰く、之に庾を與へよ。冉子之に粟五秉を與ふ。子曰く、赤の齊に適くや、肥馬に乗り、輕裘を衣たり、吾之を聞く、君子は急に周ねく富めるに繼がず。

原思之が宰となる、之に粟九百を與ふ。辭す。子曰く、母かれ、以て爾が隣里鄉黨に與へんか。

【字義】 ○子華、○公西赤の字○粟、穀のからあるもの即ちモミ○釜、六斗四升○庾、十六斗○秉、十六石○周急、困つたものに補ふ○原思、孔子の門人、姓は原名は憲、字は子思○爲之宰、宰は邑の長、之は孔子をさす、孔子この時魯の司冠たり○母、辭する勿れの意○隣里鄉黨、五家を隣とし、二十五家を里とし、一萬二千五百家を郷とし、五百家を黨とする。

【義解】 子華が孔子の使で齊の國へ行く時に、冉求が留守扶持として子華の母に粟を與へてくれと願つた。そこで孔子は粟一釜を與へよといふと、冉求はも少し増してくれといつたので、然らば一庾を與へよと命じた。すると冉求は五秉即ち八十石を與へた。それを孔子がさかれて、赤即ち子華が出發する時の様子を見ると肥馬に乗り輕裘を着てゐる、以てその富んでゐることがわかる。私の聞いたことには君子は困窮す

るものには補給し、富める者には繼ぎ足してやらないといふことである。之から見れば冉求の所置は富めるに繼いだ濫與である。又門人の原思が孔子の采邑の宰となつた時之に粟九百を與へると、原思は多すぎるといつて辭したから、孔子は否辭退するな、汝の生計に餘りがあれば汝の近隣の困つてゐる者に與へたらよいではないかといはれた。

子謂仲弓、曰犂牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸。

【讀方】 子仲弓を謂ふ、曰く、犂牛の子、騂くして且つ角あらば用ひる勿らんと欲すと雖も、山川其れ諸を捨てんや。

【字義】 ○犂牛、毛色の雜つた牛 ○騂、あかうし ○角、兩角完備して犠牲に用ふべきもの ○山川、山川の神 ○舍、すておく。

【義解】 孔子が仲弓が批評して曰く、父か惡人でも子が賢なれば世に用ひられて差支へない、例へば毛色の雜つた牛は劣等な牛であるが、若しも生んだ子が毛色が赤く

且つ角が完備してをれば犠牲の牛に用ひられる。その時賤牛の子だからといつて山川の神は之を捨てないであらう。そのやうに仲弓の父は惡くても仲弓その人の人物さへしつかりしてゐれば憂ふるに足りないのである。

子曰、回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣。

【讀方】 子曰く、回や、其の心三月仁に違はずんば、其餘は則ち日に月に至らんのみ。

【字義】 ○三月、時の久しきをいふ、月の實數ではない ○其餘、仁以外の諸徳、朱註には其餘を其の他の門人と解して回をひとり賞めた言としてあるのは賛成しかねる。

【義解】 孔子が顔回を呼びかけて曰く其の心が三月も仁に違はないやうであつたらば、他の諸徳は日に月に自然に手に入るやうになるであらう。仁に違はないのが第一の工夫であるぞといはれた。

季康子問、仲由使從政也與。子曰、由也果、於從政乎何有。曰、賜也可使從政也與。

曰、賜也達、從政乎何有。曰、求也可使從政也與。曰、求也藝、於從政乎何有。

【讀方】 季康子問ふ、仲由は政に従はしむべきかと。子曰く、由や果なり、政に従ふに於て何か有らん。曰く、賜や政に従はしむべきか。曰く、賜や達なり政に従ふに於て何か有らん。曰く、求や政に従はしむべきか。曰く、求や藝なり、政に従ふに於て何か有らん。

【字義】 ○季康子、魯の三大夫の一○果、果斷○達、物の道理にゆきわたること○藝、多能。

【義解】 魯の大夫季康子が孔子に問ふに門人の仲由は大夫として國政に與らしめてよい人物であるかと尋ねた。孔子は由は果斷の男で、裁決流るゝが如くであるから政に従事するに何の難かしいことがあらうかと答へられた。然らば賜はと問うたのに對して賜は物事に達した穎悟の人だから政に従ふに何の難きこともないと答へられた。次に冉有のことを尋ねたから、求は多能の才、政に従ふに何の不足があらうと答へられた。

季子使閔子騫爲費宰、閔子騫曰、善爲我辭焉、如有復我者、則吾必在汶上矣。

【讀方】 季氏閔子騫をして費の宰たらしむ。閔子騫曰く、善く我が爲めに辭せよ、如し我を復びする者あらば、則ち吾れ必ず汶の上にあらん。

【字義】 ○閔子騫、孔子の門人名は損○費、地名。季氏の私邑○復、重ねて召す○汶、川の名齊魯の界にある。

【義解】 季氏が閔子騫の賢なるをきいて己が私邑の費の代官たらしめんとして使者をやつて召させた。すると閔子騫は季氏の惡徳を惡んでゐたから、これが宰たることを拒絕して曰く、私のために體よくことはつて下さい、若しも二度召すやうな事があれば私は汶水のほとりに立退きますといつた。

伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也。

【讀方】 伯牛疾あり、子之を問ひ、牖より其の手を執つて、曰く、之を亡はん、命

なるかな、斯人にして斯の疾あり、斯の人にして斯の疾あり。

【字義】○伯牛、孔子の門人、德行顔回関子雋につぐ、姓は冉、名は耕字は伯牛○疾病氣、伯牛の疾は癩なりといふ○牖、まど○命、天命。

【義解】伯牛の疾あつしときいて孔子はそれを見舞はれて牖から手を執つて歎じて曰く、命旦夕に迫る、運命なるかな、斯くの如き清徳の人にしてこの不治の病があるのかとくりかへしいつて痛惜せられた。

子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也。
【讀方】子曰く、賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷にありて、人は其の憂に堪へず、回や其の樂を改めず、賢なるかな回や。

【字義】○一簞食、簞は竹器、食は飯○一瓢飲、瓢はひさご、飲はのみもの○陋巷見苦しい裏長屋。

【義解】賢きことよ顔回は、一簞の食を食ひ、一瓢の飲を飲んできたない小路に住

んでゐる、人は憂苦に堪へない所であるのに、回は其れを無上の樂しみとして決して改めない、之れ命を知り道を樂しむ者でなければ出來難いことで、賢しいことよ回はと歎美せられた。

冉求曰、非不説子之道、力不足也。子曰、力不足者中道而廢、今女畫。

【讀方】冉求曰く、子の道を説ばざるに非ず、力足らざるなり。子曰く、力足らざる者は中道にして廢す、今女は畫る。

【字義】○説、悦ぶ○中道、中途○畫、自分で見切りをつけてあきらめる。

【義解】冉求が曰ふには、私は夫子の道を悦び慕つて之を實行しようと思ひますが、力の足りない爲めに如何ともしがたいと歎じた。孔子が之を聞かれて、力の足りない者は途中でやめにしてしまふ。然るに汝はまだ出来るだけの力を出してやらない前に自分で見切りをつけてしまふやうでは、誠に不甲斐ないことであるといはれた。

子謂子夏曰、女爲君子儒、無爲小人儒。

【讀方】 子夏に謂つて曰く、女君子の儒となれ、小人の儒となる無かれ。

【字義】 ○儒、學者のこと○君子儒、大人の儒で道德を以て廣く人を治める學者○小人儒、自己一身をのみ修める學者、主として文藝を以て人に仕ふる人。

【義解】 孔子が子夏に曰ふに、儒には大小があつて、大なる儒とは道德を以て人を治むるもので君子の儒といふ、小なる者は自己一身を修めるだけを事とし、文藝を以て人に事へるもので小人の儒といふ。女は文字に長じて己れを持することも謹嚴ではあるが、道德を以て人を治めんとする大人の學に於て缺けてゐる、よろしく君子の儒たるやうに大人の學を學ぶがよいと申された。

子游爲武城宰。子曰、女得人焉爾乎。曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事未嘗至於偃之室也。

【讀方】 子游武城の宰となる。子曰く、女を得たり乎。曰く澹臺滅明なる者あり、行くに徑に由らず、公事に非ざれば未だ嘗つて偃の室に至らざるなり。

【字義】 ○武城、魯の邑名○澹臺滅明、姓は澹臺、名は滅明字は子羽○徑、狭いはやみち○偃、子游の名。

【義解】 子游が武城の邑宰となつてそこを治めてゐた時に、孔子が汝は賢人を得たかと尋ねた。子游の曰く、澹臺滅明といふ公正な屬僚を得ました。彼は道を行くに正道を通り、決して早道だからといつて小路をあるくやうな事はしません。且つまた私の室へは、公事の外は決して参りません。それ程の正しい人物であるといつた。

子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也。

【讀方】 子曰く、孟之反伐らず、奔りて殿たり、將に門に入らんとす、其の馬に策ちて曰く、敢て後れたる非ざるなり、馬進まざればなり。

【字義】 ○孟之反、魯の大夫、名は測○伐、功を誇る○奔、敗走一年に齊と戦つて敗れた時○殿、シンガリをすること○策、ひらうつ

【義解】 孔子曰く、魯の大夫孟之反は己が戦功を誇らない人であ

けた時、逃げる我軍の後殿しんがりをして寄せくる敵をくひとめた。しかも城門に
る時、自分の乗つた馬に策けちうつて曰く、強いて後殿しんがりをしたわけではない、馬が
進まないためにといった。

子曰、不有祝鮀之佞而有宋朝之美、難乎免於今之世矣。

【讀方】 子曰く、祝鮀しゆくだの佞はいありて宋朝そうてうの美び有らざれば、難がたいかな今の世よに免まひるこ
こと。

【字義】 ○祝鮀、祝は宗廟のことを掌る官、鮀は衛の大夫○佞、辯才の巧みなこと

○免、危事をまぬかれる○宋朝、宋の公子、名は朝、衛の靈公の夫人南子の男妾。

【義解】 今の世は澆季のこととて諂諛を好み、美色を好んで道を尊ぶ人がない。こ
んなわけだから祝鮀の如き辯才と宋朝の如き美貌とを持たなければ、今の世に處して
禍を免まひかれ難いであらう。

子曰、誰能出不由戸、何莫由斯道也。

【讀方】 子曰く、誰か出づるに戸こに由らざる、何ぞ斯道このみちに由ることなりや。

【字義】 ○戸、出入口、戸障子のことではない○斯道、先王の教へられた道。

【義解】 孔子曰く、家を出るに誰か出入口から出入しないものがあらう。そのや
に事を行ふに先王の道によるべき筈であるのに、近頃の人は先王の教へにそむいた
ととしてゐる、誠に困つたことであると嘆息された。

子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬然、後君子。

【讀方】 子曰く、質しつぽん文ぶんに勝てば則ち野や、文ぶん質しつに勝てば則ち史し、文質ぶんしつ彬彬びんびんとして然る
後に君子なり。

【字義】 ○質、忠信誠實の如き實心○文、禮儀文辭の如き文飾○野、野人の、

○史、文筆の吏○彬彬、物のよく揃つたさま、文質共に具れる形。

【義解】 内にある誠實の心が多くて外にあらはれる進退動作言語文章
ない時は、其の人は野人の如く野卑である。之れに反して禮儀整ひ言

巧みだが誠實心の足りない時は、彼の文章の吏の如く巧言令色に陥る威儀文章の文飾とが兼ね具つて後に始めて成徳の君子である。

子曰、人之生也直。罔之生也、幸而免。

【讀方】 子曰く、人の生けるや直ければなり。之を罔ひて生けるは、幸にしゝなり。

【字義】 ○直、正直○罔之、罔は正道を誣ひること、邪曲を行ふこと○幸而免、倖にも刑罰をのがれてゐる。

【義解】 孔子曰く、人の此の世に生存することの出来るのは、正直なるを以て無事なるを得るのである。若しも正直の道を罔ひて邪悪を行つて生活するならば、それは幸に天罰を免かれてゐるに過ぎないのである。

子曰、知之者、不如好之者、好之者、不如樂之者。

【讀方】 子曰く、之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は、之を樂しむ者に如かず。

に如かず。

【字義】 ○之、之は道をさす。

【義解】 人道を知る者は之を知りたる上に好み嗜む者には及ばない。之を好む者更に道を行ふを樂しみとし、道德の中に自己をとけこませてゐる者には及ばない。

子曰、中人以上、可以語上也。中人以下、不可以語上也。

【讀方】 子曰く、中人以上は以て上を語るべし。中人以下は以て上を語るべからざるなり。

【字義】 ○上、高尚な道理。

【義解】 人の品質には上中下の三様ある。中以上の人は高尚なる道理を説いてもよく理解し得るが、下凡の人は到底高尚な理窟がわからないから、かへつて説かぬがよ

樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。問仁。曰、仁者先難而後獲、

可謂仁矣。

【讀方】 樊遲はんち知を問ふ。子曰く、民ひとの義を務め、鬼神を敬して之を遠とほざくるは、知と謂ふべし。仁を問ふ。曰く、仁者は難がたを先にし獲るを後にす、仁と謂ふべし。

【字義】 ○民、人○先難、難事、勞苦を先にする○後獲、利益成功をあとにする。

【義解】 樊遲が知と仁とを尋ねた。孔子の答へに曰く、人の人たる義務を行ひ務めて、鬼神は尊敬するけれども、之れに陥り近づかない事が知であつて、難事勞苦を先にして利益といふことは第二においてする人は仁であると。

子曰く、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。

【讀方】 子曰く、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂しみ仁者は壽いひちながし。

【義解】 孔子曰く、知者は性質水の發動するに似てゐるから水を樂しみ、仁者は山の動かざるが如く靜寂なる故に山を樂しむ。知者は才智を運用して世を治むること水

の流れ物潤ほすが如くである故に動的である。仁者は重厚にして人を愛すること山の泰然として動かずして草木禽獸を生ずるに似てゐるから、靜的である。知者は動いて功をなすから憂なくして樂しみ、仁者は悠々として世外に超越してゐるから何等の外的煩悶もなくして長命を保つ。

子曰く、齊一變至於魯。魯一變至於道。

【讀方】 子曰く、齊は一變すれば魯に至らん。魯一變すれば道に至らん。

【義解】 齊は大公望の封ぜられた國、魯は周公の封ぜられた國だから、共に先王の道が残つてゐる。而して齊は稍、覇政の餘弊があるが、之を一變すれば魯の如くにならうし、魯は禮儀を重んずる國であるから、一變すれば仁義道德を行ふことの出来る國になるであらう。

子曰く、觚不觚、觚哉觚哉。

【讀方】 子曰く、觚こならず、觚こならんや觚こならんや。

【字義】 ○觚、稜のこと、昔稜のある杯を觚といつた。

【義解】 孔子曰く、今の觚は觚がないから、ほんとの觚ではない。豈之を觚といふことが出来やうかと嘆じられた。蓋し當時の君臣父子の道亂れて古の如くでないのをなげいて觚に托していはれたのである。

✓宰我问曰、仁者雖告之曰井有仁焉、夫從之也。子曰、何爲其然也、君子可逝也、不可陷也、可欺也、不可罔也。

【讀方】 宰我问ふて曰く、仁者は之に告げて井に仁ありと曰ふと雖も、夫れ之れに従はんや。子曰く、何爲れぞ其れ然らん、君子は逝かしむべし、陷おとしるべからず。欺あそびくべし、罔まごふべからざるなり。

【字義】 ○仁、人○逝、往く○欺、道理を以て人をだます○罔、道理に外れたこと
で人をだます。

【義解】 宰我が問ふて曰く、仁ある人は、此の人に告げて今井戸に人が落ちてゐま

すからといつてだました時に井戸の中へ飛びこんで救ひますかと。孔子曰く何でそんな馬鹿な事をするものか。仁者はそのこときいて井戸までは往くであらう。けれども身を躍らして救ふやうな無益な事はしない。君子は道理にあつたことをいつてだますことは出来ても、義に外れた事では出来ません。出来ません。

子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。

【讀方】 子曰く、君子は博ひろく文ぶんを學んで之を約やくするに禮を以てすれば、亦畔そむかざるべし。

【字義】 ○約、要約す、しめくくる○畔、背く。

【義解】 孔子曰く、凡そ學者が道を學ぶに、詩書六藝等の文學を博く學んで闕かくる所なきやうにし、更に之を散漫ならしめないために締めくくるに禮の規矩を身に行ふ。かくすれば道に背かない君子となるであらう。

✓子見南子。子路不說。夫子矢之曰、予所否者、天厭之、天厭之。

【讀方】 子南子を見る。子路説よろこひず、夫子之に矢やつて曰く、予の否いなとするかが天之を厭いとん、天之を厭いとん。

【字義】 ○南子、衛の靈公の夫人で淫行の人○矢、誓ちかふ○否、禮にかなはないこと○厭、絶たつ、すてる。

【義解】 孔子が衛の南子に謁見された時、子路は南子が淫亂の夫人であつたから、その謁見を喜ばなかつた。すると孔子は子路に誓つて曰く、我のすることが禮に違ひ義に悖ることがあれば天は我を棄てるであらう。しかし我の謁見は國君の夫人に對する禮であつて、我は天にすてられるやうなことはしない。

○子曰、中庸之爲徳也、其至矣乎。民鮮久矣。

【讀方】 子曰く、中庸の徳たるや其れ至れるかな。民鮮あまきこと久し。

【義解】 孔子曰く、中庸の徳たるや至美至善過不及なき至極の徳である。しかしながら教化衰へて人民この徳を守るものが殆どないと歎じられた。

○子貢曰、如有博施於民、而能濟衆何如、可謂仁乎。子曰何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸。夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬、可謂仁之方也已。

【讀方】 子貢曰く、如し博ひろく民に施して、能く衆を濟すくふあらば何如、仁と謂ふべきか。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か、堯舜も其れ猶ほ諸こゝを病めり。夫れ仁者は己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す。能く近く譬たとえを取る、仁の方ほうといふべきのみ。

【字義】 ○博施、廣く恩惠を施す○濟衆、多くの民をすくふ○何事於仁、仁に止まらない○病諸、これを心配した○近取譬、自分の身に近く例をとる○仁之方、仁の仕方。

【義解】 子貢が問ふて曰く、廣く恩澤を人民に施して衆人を救濟する者があれば仁者といつてよろしいかと。孔子曰く、何ぞ夫れは仁といふだけに止まらうか、必ずや聖人の仕事である、堯舜でさへも此の事を心配されたものであると。かゝる大事は及

ひ難いことだから仁の方法について一言せんは、己れ身を立てんとする心あれば人も立てしめ、己れ志を達せんとする心があれば人にも達せしめる。かくの如く我身に近づけて人を推し量り我願ふ所は人に施すやうにすることが仁の仕方であると教へられた。

述而第七

此の篇は凡べて三十七章。主に謙辭、容貌、行事を記す。

○子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭。

【讀方】子曰く、述べて作らず、信じて古を好む、竊かに我が老彭に比す。

【字義】 ○述而不作、先王の道を祖述して敢て新しく作り出さない ○老彭、殷の賢大夫。

【義解】 我が平生いふ所は古聖人の道であつて、我は新しく創作したことはない。

只古の事を好み信じてそれを祖述したのである。故に殷の大夫老彭に較べて其の真似をするに過ぎないのである。

子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。

【讀方】 子曰く、黙して之を識り、學んで厭はず、人に誨へて倦まず。らんや。

【字義】 ○識、口言はずして心に悟了すること ○誨、教へる。

【義解】 孔子曰く、沈黙して言はないけれども心に悟りあきらめ 日夜

學んで厭はず、人を教ふるに諄々としてあきないで教養する。このことであると謙遜された。

子曰、德之不修、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也

【讀方】 子曰く、徳を之れ脩めざる、學を之れ講ぜざる、義を聞不善を改むる能はざる、是れ吾が憂なり。

【義解】 孔子曰く、身を修めて徳器を成就することの出来ないことと、學問で講究することの出来ないことと、義を聞いてもそれに徙ることの出来ないこと、悪い事を知りつつ改むることの出来ないこと、此の四は私の常に掛念する所のものある。

子之燕居、申々如也、天天如也。

【讀方】 子の燕居、申々如たり、天天如たり。

【字義】 ○燕居、閑暇無事の時○申申如、容のうちくつろいでゆつくりした貌○天天、顔色の怡へる貌。

【義解】 孔子の閑居の有様を見るに、申申としてのびくと打ちくつろぎ、天天として和ぎ楽しんでゐる。心廣く體胖な悠々自適の有様である。

子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公。

【讀方】 子曰く、甚しいかな吾れの衰へたるや、久しく吾れに周公を見ず。

【義解】 孔子曰く、私の周公の道を行はうと努めて居つた時は、夢寢にも周公を忘れなかつたがこの頃氣力の衰へたせいかな、夢にすらも周公を見ないやうになつた。

子曰、志於道、據於徳、依於仁、游於藝。

【讀方】 子曰く、道に志ざし、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。

【字義】 ○游於藝、藝は禮樂射御書數の道、游は心をよせる。

【義解】 孔子曰く、人の學問をするには、第一先王の道に志ざしを立て、の徳性を根據とし、博愛の仁により、更に禮樂の文、射御書數の諸藝を修めよつて完成するものである。

子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。

【讀方】 子曰く、束脩を行つて自り以上は、吾未だ嘗つて誨ふる無く。

【字義】 ○束脩、束は十束、脩は乾肉、師匠に禮物として持つてきたもの。

【義解】 孔子曰く、私の所へ弟子入をして束脩をもつてきてからは、弟子

剛毅

誨訓陶しないことはない。

○

子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅、不以三隅反、則不復也。

【讀方】 子曰く、憤せずんば啓せず、悱せずんば、復せず。一隅を以て反さずんば、則ち復びせざるなり。

【字義】 ○憤、心に通ぜざるために腹立たしく思ふの意、口に言はんやない貌。

【義解】 孔子曰く、吾れ人を教育するに、其人自ら研求して其の事を知りて其の事を知るやうに思ふべし。又譯は稍わかつたがまだ十分に口で言ひ得なくともどこかしの所まで來なければ、就義を發明してやらない。又四隅の内その一隅だけ知れて、他の三隅は自分に分らない。反問するのでなければ、二度とくどくど教へない。吾れ自ら研求して其の事を知るやうに思ふべし。

欠

欠

【讀方】 子曰く、富にして、求むべくんば、執鞭之士と雖も、吾れ亦之を爲さん。如し求むべからざれば、吾れは好む所に従はん。

【字義】 ○執鞭之士、鞭をとつて通行人をさげさせる賤しい役人○吾所好、仁義徳。

【義解】 孔子曰く、富が人力で求めることが出来るならば、私は執鞭氏のやうしい職業にでも従事しよう。しかし富は天命で、人力では未だ之を如何ともするの出来ないものである。人力もて如何とも求め得ないものならば私は好む所の仁を熱心にやりたいものだ。

子之所慎、齊、戰、疾。

【讀方】 子の慎しむ所は。齊、戰、疾。

【字義】 ○齊、齋と通ず、モノイミして心身を清めること。

【義解】 夫子の常に慎しみ懼れたものは、神を祀る時の齋戒と戦争、疾病とす。

つた。齋戒は神を尊敬する所以、戦は一國の興亡に關すること、病は一身の存亡に關すること、共に慎しむべき大事である。

子在齊聞韶、三月不知肉味。曰不圖爲樂之至於斯也。

【讀方】 子齊に在りし時韶を聞き、三月肉の味を知らず、曰く、圖らざりき樂を爲すの斯に至らんとは。

【字義】 ○韶、帝舜の音樂、至善至美の樂。三月は三月に過ぎず、久しきをわづらふ也。

【義解】 孔子が齊の國で韶といふ音樂をきいて非常に喜ばれて深く之を樂しみ、三月の長し間一心になつて毎日たべる肉の味も忘れた程であつた。そこで感歎して曰く、音樂の美妙この肉味を忘れる程にならうとは思はなかつたと。

冉有曰、夫子爲衛君乎。子貢曰、諾、吾將問之。入曰、伯夷叔齊何人也。曰、古之賢人也。曰、怨乎。曰、求仁而得仁、又何怨。出曰、夫子不爲也。

【讀方】 冉有曰く、夫子衛の君の爲めにせんか。子貢曰く、諾、吾れ將に之を問は

んとす、入つて曰く、伯夷叔齊は何人ぞや。曰く、古の賢人なり、曰く、怨たりや。曰く仁を求めて仁を得たり、又何をか怨みん。出でて曰く、夫子は爲はせざるなり。

【字義】 ○爲衛君乎、爲は助けると同じ、衛君は出公輒のことで、此の時衛の靈公薨じて孫輒が立つた。然るに先きに追はれた太子蒯聵が晉の兵の助を得て國に入らんとした。輒は父子であるから、冉有は君に仕へんか、又君の父たる蒯聵に與するが正當なりや迷つて質問した。

【義解】 冉有が子貢に問うて曰く、此の場合夫子は衛の君をお助けになるだらうかと。子貢が曰く、よろしい、實は私も聞かうと思つてゐる所であつたといつて、孔子の室に入つて行つた。そして直接その事をきくは臣にして主を議することになるから之をさけて例を以て尋ねた。古の伯夷叔齊は如何なる人ですかと。孔子曰く、古の聖人である。子貢は更に二人は怨み憤つたのでせうかと問うた。孔子曰く、二人を求めて仁を得た、即ち父の違命に背き能はないのは伯夷の仁で、兄を

びないのは叔齊の仁で、二人とも位につかずして仁心を全うしたから怨む
いつた。子貢が退出して冉有につけて曰く、先生は衛の君を助けないのであらう。

父子國を争ふ衛君の不仁を助けないことは伯夷叔齊の例で明かであるといつた。

子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。
【讀方】 子曰く、疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす、樂しみ亦其中
に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。

【字義】 ○疏食、玄米の飯○肱、ひじ。

【義解】 孔子曰く、玄米の飯を食ひ、冷水を飲み、寢るに枕なくして臂をまげて枕
の代用にするやうな貧賤の中にも至樂の境地はある。之れに反して不義の富貴は天上
の浮雲の如くで我の欲する所ではない。

子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。

【讀方】 子曰く、我に數年を加へて、五十以て易を學ばば、以て大過なかるべし。

【義解】 孔子の四十五六歳の時の言、我に數年の壽命を貸すならば五十迄に易を學
んだならば、大なる過失をすることがないであらうと。

子所雅言、詩書、執禮。皆雅言也。

【讀方】 子雅言する所は、詩書、執禮なり。皆雅言するなり。

【字義】 ○雅言、雅は正しきなりとも常になりとも兩説あり。今前説に従つて正し
い語を以て讀むことと解す○詩書執禮、詩は詩經、書は書經、執禮は禮をとり行ふこと

【義解】 當時は方言俗語を用ひなければ日用を辨じ得ない有様であつたが、孔子は
魯の方言でない正しい語を以て語り發音する所のものは、詩書執禮の場であつて、此
の時は必ず正しく讀まれたのであつた。蓋し孔子の古典尊重の意である。

葉公問孔子於子路。子路不對。子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知
老之將至、云爾。

【讀方】 葉公孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚曰はざる、其の人とな

りや、憤ふんを發して食を忘れ、楽しんで憂うれを忘れ、老の將まさに至らんとするを知らずと爾しか云はん。

【字義】 ○葉公、楚その葉縣せつけんの尹いんたる沈諸梁しんしよのこと、僭けんして公こうといふ。

【義解】 楚の葉縣の長沈諸梁が孔子は如何なる人ぞと子路に尋ねた。子路はその僭越であるのと、孔子の聖徳を一言に盡くすことの出来ないとて何とも對へなかつた。

孔子がさいて曰く、女はなぜかういはなかつたか。孔子の人と爲りは學を好んで心に得ざることあれば發憤して、思索し食事を忘れる程で、又學を講じ道を楽しんで倦むことなく、老境が近づいてくるのも知らずに孜々と勉めてゐると。曰はなかつたのかと。

子曰、我非生而知之者、好古、敏以求之者也。

【讀方】 子曰く、我れ生れながらにして之を知る者に非ず、古を好み、敏びんにして以て之を求むる者なり。

【義解】 孔子曰く、我は生れたまへで物の道理を知つてゐるのではない。古の道を

好んで敏捷に工夫をこらして以て道理を自得したものである。

子不語怪力亂神。

【讀方】 子し怪くわい力りき亂らん神しんを語かたらず。

【字義】 ○怪、怪異なこと○力、勇力○亂、悖亂ハイ○神、鬼神。

【義解】 夫子の言はないことが四つある。一は怪奇なこと幽靈妖怪の話、次には血の勇、次には君に叛き父を弑するの亂行、次は鬼神の幽渺はかり知るべからざること、此の四つを語らなかつた。

子曰、三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之。

【讀方】 子曰く、三人行へば、必ず我師あり。其の善なる者たを擇んで之に従ひ、其の不善なる者は之あを改む。

【義解】 三人集れば我師我手本となるべき人がある。その善い點を擇

その惡しき點を己が身に省みて改める。かく考へれば我師ならざる。

子曰、天生德於予、桓魋其如予何。

【讀方】 子曰く、天、徳を予に生ず、桓魋其れ予を如何せんや。

【字義】 ○桓魋、宋の司馬向魋、先祖が桓公から出たので桓氏を稱す。

【義解】 孔子が衛から宋に往く途中大樹の下に弟子を集めて學を講じて居られたすと桓魋が孔子を害せんとして兵士を遣はして樹を切つて壓殺しようとした。此の時弟子達が早くここを去れと心配していつた時に、我の徳は天より與へられものであるから、天は必ず吾を保護されるであらう。天の命によつてゐる以上には桓魋如き者がいかに予を害せんとした所が何をか爲し得ようかと、自信の強きを示し、且つ弟子を安心せしめた。

子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者、是丘也。

【讀方】 子曰く、二三子我を以て隠すとすか、吾爾に隱すことなし、吾れ行ふとして二三子と與にせざる者なし、是れ丘なり。

【字義】 ○二三子、汝等、弟子達のこと。

【義解】 孔子の弟子達が夫子の説く所常に日常の平易な教であらから、尙の高遠深微の道を隠して教へないのだと推してゐる者があつたから、孔子は二に少しも隠す所はない。日常の行往座臥すべて教育であつて、それを爾等といふことはないではないか。是れ我が教育法である。

子以四教。文、教、忠、信。

【讀方】 子四を以て教ふ。文、教、忠、信。

【義解】 孔子曰く、私は門人を教へるに四箇條を以てする。一は文學、詩、學ぶこと、二は實踐躬行、三は忠誠をつくして私心なきこと、四は信實にしないことである。是れ所謂孔門の四科の教である。

子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者斯可矣。子曰善人吾不得而見之矣、得見有恒者斯可矣。亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恒矣。

【讀方】 子曰く、聖人は吾れ得て之を見るを得ず、君子者を見るを得ば斯に可なり。子曰く善人は吾れ得て之を見ず、恒ある者を見るを得ば斯に可なり。亡くして有りとなし、虚にして盈てりと爲し、約にして泰となす、難いかな恒あること。

【字義】 ○有恒者、心を一にして行のかはらぬ人○亡、無いこと○約、窮約、こまること○泰、奢侈ぜいたく。

【義解】 孔子曰く、聖人の如き神明測り知れざる人は容易に出現するものでないから、せめて才徳高き君子人を見ることが出来ればそれで宜しい。又曰く、今日の世衰へて善人さへも見ることが出来ないやうになつた。しかし恒心ある人即ち言行を二にしないやうな篤實な人を見ることが出来れば先づ満足しなければならぬ。學問德行なくして有るが如く見せかけ、空虚な思想を充實せる如くいひふらし、貧乏にして富者の眞似をしたがる如き風が強い現在の世の中に於て、恒心ある者は誠に少いのである。子釣而不綱、弋而不射宿。

【讀方】 ○子釣して綱せず、弋して宿と射ず。

【字義】 ○綱、網する、○弋、絲を矢につけて射る○宿、木にとまつてねてゐる鳥。

【義解】 孔子は鳥や魚をとられるにも、無慈悲な事はしなかつた。例へば魚を糸で一匹づつ釣ることはするが、一網にとることはしなかつた。又弋を射て鳥をとるが、ねてゐる鳥をとるやうなことはしなかつた。けだし仁が鳥魚にまで及んだのである。

子曰く、蓋有不知而作之者、我無是也。多聞擇其善者而從之。多見而識之、知之次也。

【讀方】 子曰く、蓋し知らずして之を作す者あらん、我は是れ無きなり。多く聞いて其の善なる者を選んで之れに従ふ。多く見て之を識るすは、知の次なり。

【字義】 ○作、爲す○識、識別する。

【義解】 孔子曰く、世には理非を知らないで妄りに行ふ者があらうが、私は明なしと雖も幸に多くさいて善なるものを選び多く見て善惡を識別することが出来る。之れは知者といふ譯にはいかぬが次の位に屬すべきであらう。但し之には異説があつて、

「不知而作之」を妄りに禮樂を作ると解し、「識之」を記録する意味にとるものがあるが當らなう。

互郷難與言。童子見。門人惑。子曰、與其進也、不與其退也、唯何甚、人潔己以進、與其潔也、不保其往也。

【讀方】互郷與に言ひ難し。童子見ゆ。門人惑ふ。子曰く、其の進むを與るせ、其の退どくを與さす、唯何を甚しき。人己を潔くして以て進まば、其の潔を與す。其の往を保たず。

【字義】○互郷難與言、互郷は郷の名、風俗悪くて善事を語るに足りない○與、許す○往、今後。

【義解】互郷といふ所の風俗が悪くて到底教ふるに足りないので世の入がつかまはじきをしてゐた。するとその郷の若者が孔子の門人ならんと願つた。そこで門人達は長つたがしまいと思つて許可してよいか惑つた。その時孔子の曰く、進んで來るを

許せ、其の退くだらうと思つて許さないのは度量が甚しく狭いではないか。潔くして進んで來るならば、その潔にめでて許すがよい。そして其の後の車得られないから、去る者は追はずでよいではないかといはれた。

○子曰、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣。

【讀方】子曰く、仁遠からんや、我れ仁を欲して、斯に仁至る。

【義解】孔子曰く、仁は遠いものであらうか。否我が心にある、忠恕の心博く衆を愛する心で、もと我が心内のものである。故に我れ仁ならんとすれば期は仁は至る。何ぞ之を遠きに求める必要はないのである。

陳司敗問、昭公知禮乎。孔子曰、知禮。孔子退。揖巫馬期而進之曰、吾聞君子不黨、君子亦黨乎、君取於吳、爲同姓謂之吳孟子、君而知禮、孰不知禮。巫馬期以告。子曰、丘也幸、苟有過人必知之。

【讀方】陳の司敗問ふ、昭公禮を知るか。孔子曰く、禮を知る。孔子退く。巫馬期

を揖して之を進めて曰く、吾れ聞く君子は黨せずと、君子も亦黨するか、君吳に取る、同姓なるがために之を吳孟子と謂ふ、君にして禮を知らば、孰か禮を知らざらん。巫馬期以て告ぐ。子曰く、丘や幸なり、苟も過あれば人必ず之を知る。

【字義】 ○陳、國名○司敗、官名、大夫の役○昭公、魯の君、名は稠○揖、手を拱き頭を垂れて會釋する○巫馬期、孔子の門人、巫馬は姓、期は字、名は施○黨、仲間が助け合つて惡を匿すこと○取、妻を娶る○同姓、魯も吳も同じく姬姓、同姓は婚せざるが禮である。そして普通は國と名を一しよにして吳姬といふべきであるが昭公憚つて吳孟子といふ。

【義解】 陳の司敗といふ役をしてゐる人が、孔子に魯の昭公は禮を知つてゐますかと尋ねて。孔子は君の惡といふわけに行かないから、禮を知ると答へた。すると孔子が退いて後、司敗は門人の巫馬期に一禮して之を近づかせて曰く、私は君子は黨して互に惡を匿すやうなことはせぬものと聞いてゐたが、夫子は黨するに似てゐる。何故な

れば魯君は同姓の吳から娶られた。禮に同姓は婚せずといつてゐるから禮に反いてゐる譯である。然るに昭公はそれを蔽はんために吳孟姬といふべき所を吳孟子といつてゐる、若し昭公にして禮を知つてゐるといふならば、天下何人と雖も禮を知らない人があらうかといつた。巫馬期はこのことを孔子に告げると、孔子は私は幸福である、過失があれば人が親切に知らせてくれる、誠に有りがたいと言はれた。蓋し自分の國惡を諱んだことを辯解しないで、相手の言を是認された度量を見る事が出来る。

子與人歌而善、必使反之、而後和之。

【讀方】 子人と歌つて善ければ、必ず之を反さしむ、而して後之に和す。

【義解】 孔子が人と歌を歌つて、その人の歌が音節になつてをれば、之を今一度反覆させ、更に次には自分も相和して歌はれた。かく人の長所をとることを楽しまれた。

子曰、文莫吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得。

【讀方】 子曰く、文は吾れ猶ほ人の如く莫からんや。躬から君子を行ふは、則ち吾れ未だ之を得る有らず。

【義解】 孔子曰く、文學を學ぶことは私も人の如くにやれないことはないけれども、君子の道を実践躬行することは、私には出来ないことであると謙遜された。

子曰く、若聖與仁、則吾豈敢抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣。公西華曰、正唯弟子不能學也。

【讀方】 子曰く、聖と仁との如きは、則ち吾豈敢てせんや、抑之を爲して、厭はず、人を誨へて倦まざるは、則ち爾云ふと謂ふべきのみ。公西華曰く、正に唯弟子の學ぶ能はざる所なり。

【字義】 ○爲之、聖者と仁者の道をなす○公西華、門人名は赤。

【義解】 孔子曰く、吾れを聖者又は仁者といふのは當らない。唯仁義の道を學んで厭はず、人を誨へて倦まないことのみが稍ままつてゐる點であると。公西華曰く、そ

れが正に弟子の到底及ばない所であると。

子疾病。子路請禱。子曰有諸。子路對曰、有之、誄曰、禱爾于上下神祇。子曰、丘之禱久矣。

【讀方】 子疾病なり。子路禱らんことを請ふ。子曰く諸有りや。子路對へて曰く、之れ有り、誄に曰はく、爾を上下の神祇に禱ると。子曰く、丘の禱るや久し。

【字義】 ○疾病、疾が篤い○禱、神に過を悔い善に遷るを誓ふこと○誄、死を哀みて其行を述べる詞、禱書の誄篇にある。

【義解】 孔子が病の篤かつた時子路が鬼神に禱らうと願つた。孔子は古にそんな例があるかと尋ねると、子路は曰く、有ります、禱書の誄篇に「爾を上下の神祇に禱る」といふ語がありますと對へた。そこで孔子の曰く禱るとは過を悔い善に遷らんとするため、さういふ意味の禱りは私は久しく實行してゐるから、今特別に禱る必要はないといはれた。

子曰、奢則不孫、儉則固、與其不孫也寧固。

【讀方】子曰く、奢しやなれば則ち不孫ふそん、儉けんなれば則ち固こ、其の不孫ふそんならんよりは、寧ろ固こなれ。

【字義】 ○不孫、孫は遜と同じで、物事を控目にしないこと ○固、頑固、固陋。

【義解】 孔子曰く、奢侈なれば華美驕慢に流れて身分を過ぎ、儉約なれば義理をかつて固陋に陥いる弊がある。宜しく此の兩者をさけて中庸を行ふべきであるが、やむを得なければ驕奢にして不遜ならんよりは、檢素にして固陋なる方がまだ増しである。

子曰、君子坦蕩蕩。小人長戚戚。

36 【讀方】子曰く、君子は坦たいかに蕩たう蕩たうたり。小人は長とこしへに戚せき戚せきたり。

【字義】 ○坦、平たいか ○蕩たう々、寛やかな貌 ○長、常に、年中 ○戚せき戚せき、憂懼の貌。

【義解】 孔子曰く、君子は天命を知り、己の分に安んじて道を楽しむから、如何なる境遇に居つても平らかにして寛やかでゆつたりしてゐる。之に反して小人は天命を

知らず、名利に汲々としてゐるから、心常に憂へ多く不平勝である。

子温而厲、威而不猛、恭而安。

【讀方】 子は温おんにして厲れいしく、威いありて猛まうからず、恭きやうにして安あんし。

【字義】 ○温。温和 ○厲。嚴正 ○威。威光 ○不猛、おそろしくない ○恭、うやうやしい ○安、安舒のびくとしてゐる。

【義解】 孔子の徳容を見るに、顔色温和であるが、中に嚴肅な所があり、威嚴があつて狎れ難いがおそろしい感じはしない。恭敬できちんとしてゐるが、のびくとして安らかな感じがする。

泰伯第八

此の篇すべて二十一章。

子曰、泰伯其可謂至徳也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉。

【讀方】子曰く、泰伯は其れ至徳と謂ふべきのみ、三度天下を以て讓る、民得て稱するなし。

【字義】 ○泰伯、周の大王の長子、位を季歴に讓る ○稱 稱讚する。

【義解】 孔子曰く、周の大王の長子泰伯は至徳の人である。蠻夷の國に行つて位を弟季歴に讓て父の志を成し、而もその讓り方が巧妙で人民がその讓つたことについて稱讚するものがない。これ至徳な人たる所以である。

子曰、恭而無禮則勞、慎而無禮則蕙、直而無禮則絞。

【讀方】 子曰く、恭にして禮無ければ則ち勞す、慎みて禮無ければ則ち蕙る、勇にして禮無ければ則ち亂す、直にして禮無ければ則ち絞す。

【字義】 ○蕙、おそれる ○絞、急切で、ゆとりのないこと。

【義解】 孔子曰く、恭、慎勇、直は美徳であるけれども、之を節するに禮を以てしないと不徳に陥ることがある。恭にすぎて度を過せば益もなく身體を勞することになり、

慎しみ深くして禮なければ只びく／＼畏れるのみとなり、勇氣果敢であつても度を超せば上を犯すやうな亂暴に陥り、正直であつても禮を失へば人を迫むるに及してゆとりのない人となる。故に禮を以て調節しなければならぬ。

君子篤於親、則民興於仁、故舊不遺、則民不偷。

【讀方】 君子親に篤ければ、則ち民仁に興り、故舊遺れざれば則ち民偷からず。

【字義】 ○親、親族 ○偷、薄す。

【義解】 君子（上位に立つ人）が親族を敬愛すれば、人民は自然に感化されて仁にあこり以て相敬愛する。又舊臣舊友などの昔なじみをすてないで大切にすれば、人民は自ら薫化されて輕薄に流れない。要は民を治むるは己を修むるの意を云つたのである。

會子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後吾知免夫。小子。

○【讀方】 曾子疾あり、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。今にして後吾免かるるを知る、小子。

【字義】 ○啓、開く○詩、小雅小旻の篇○戰戰兢兢、おそれつつしむ貌○而今而後今日より後○免、不孝の罪を免れる○小子、汝等よと呼びかけた言葉。

【義解】 曾子が病篤くなつた時門人を呼んで曰く、予が手足を開け、そして痕があるか改めて見よ、少しも毀損してゐないだらう。予れ平生身を守るに努め、詩に歌つてあるやうに戦々兢兢としてつつしみおそれ、薄氷を履むやうに氣遣つてゐたから、不孝の罪を免かるることが出来た。汝等よと戒められた。

○曾子有疾、孟敬子問之。曾子曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善。君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣。正顔色、斯近信矣。出辭氣、斯遠鄙倍矣。筵豆之事、則有司存。

【讀方】 曾子疾あり、孟敬子之を問ふ。曾子言つて曰く、鳥の將に死なんとするや其の鳴くや哀し、人の將に死なんとするや、其の言ふや善し。君子道に貴ぶ所の者三つ、容貌を動かして斯に暴慢に遠ざかる。顔色を正しうして斯に信に近づく。辭氣を出して斯に鄙倍に遠ざかる。筵豆の事は有司なす。

【字義】 ○孟敬子、魯の大夫仲孫氏名は捷○君子、こゝは位をいふ○暴慢、粗暴怠慢○辭氣、言語音聲○鄙倍、倍は背く、野鄙にして道理に背くこと○筵豆、食物を盛る祭器、筵は竹で作つて果物を盛り、豆は木で作つて菹醢を盛る○有司、役人。

【義解】 曾子の疾篤い時に魯の大夫孟敬子が見舞に來た。そこで曾子曰く、鳥の將に死なんとする時はその聲が哀しく、人の將に死なんとする時はその言ふ聲は善なりといふ。よつて我の今はの際の言を信じてお聞きなさい。抑々人の上に立つ君子たるものは大切な心得が三個條ある。その一は舉動を慎重にして粗暴放漫に遠ざかり、二は顔色を正しくして信實に近づき。三は言語音聲を發するや雅正和平にして卑俗野

鄙に遠ざかることである。而して彼の祭の事などに至つては禮の亦なるもの、夫れを官吏にまかせておいて差支へないから、右の三箇條をよく守るがよい。

曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾嘗從事於斯矣。

【讀方】 曾子曰く、能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れど若く、實れども虚しさが若く、犯して校せず、昔は吾友嘗つて斯に従事せり。

【字義】 ○實若虚、徳が充實してゐても不足に思ふ、○犯而不校、校は自他の情直をはかりくらへること、人が自分を犯しても仕返しをしない○吾友、顔回のこと。

【義解】 曾子曰く、多才の能力を以て不能の人に問ひ、多識の學を持ちてしかる知の人に尋ね、徳は充實しても尙足らずとして勵み、人から無理をいはれて仕返しをせよの仕返しをしようとしな。世に稀な君子の行ひであるが、此の事は我長顔回の嘗つて爲したことであつた。

曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與、君子人也。

【讀方】 曾子曰く、以て六尺の孤を托すべく、以て百里の命を寄すべし、大節に臨んで奪ふべからざるなり、君子の人か、君子の人なり。

【字義】 ○六尺之孤、六尺は年十五、孤はみなしご、幼君のこと○寄百里之命、百里は大諸侯の領地、諸侯の命令を委任すること○大節、大事の場合。

【義解】 曾子曰く、ここに人があつて、之れに幼君を托して輔佐せしむべく、之れに諸侯の政を代行はしむべく、國家社會の大事な場合に其の志しを奪ふことの出來ない固い節操を持つてゐる。かゝる人は果して君子といふべきであらうか。然りこれに立派な君子人といふべきである。

曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎。

【讀方】 曾子曰く、士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し、仁以て己が任となす、亦重からずや、死して後己む、又遠からずや。

【字義】 ○弘毅、度量廣く忍耐強きこと○任、負擔。

【義解】 士たる者は度量廣く忍耐心強くなければならぬ。その身の負擔重く道中は長いからである。何故に負擔重きかといふに仁を以て其の任とするからである。又何故に道中長きかといふに死に至るまで仁を行ふの責任があるからである。

子曰、興於詩、立於禮、成於樂。

【讀方】 子曰く、詩に興り、禮に立ち、樂に成る。

【字義】 ○興、志を善に起す○立、徳立つ○成、徳成就す。

【義解】 孔子曰く、學問をなすに三段の順序がある。先づ詩を學ぶ。詩は性情を本としてゐるから、正邪善惡を明かにして人心を善に興起させる。禮は恭敬を本としてゐるから座作進退禮に適へば徳が自ら心中に立つ。樂は音律調和して人心を和ぐもの

だから、義に精しく仁に熟して徳が成就するやうになる。

子曰、民可使由之、不可使知之。

【讀方】 子曰く、民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず。

【字義】 ○由、政教に従ふ○之、上の之は政教を指し下の之は政教の理をいふ。

【義解】 君子政をなすに仁によるから可ならざる事はない故に、愚昧なる人民は之に由り従はせればよろしい。敢てその理由を知らせるには及ばない。之を知れば法を輕んずるに至るから寧ろ知らせない方がよい。蓋し儒教の政治思想の一大缺點を暴露したもので、人民の意志を無視した専制政治の根本思潮で、上に立つ君子の仕方には間違のないもの、下の人民は愚昧度すべからざるものと始めから極めてかゝつてゐる點に大なる錯誤を持つてゐる。(この文非難するを説く)

子曰、好勇疾貧、亂也。人而不仁、疾之已甚、亂也。

【讀方】 子曰く、勇を好んで貧を疾むは、亂なり。人にして不仁、之を疾むこと甚

Yes. 知れざることを 困難と見せしめ 是れをわきまを 知らざることを 是れを疾むとす 是れは強りに ありたり

だしければ、亂なり。

【字義】 ○疾、にく惡み嫌ふ○已甚、あまりに甚はだしい。

【義解】 孔子曰く、勇を好むはよいが、己が勇を好む所から己の貧賤なのを憤り悪めば、不平にたえかねて亂暴をなすやうになる。又人の不仁なのを惡にくむは悪いことではないが、之を忌み嫌ふこと餘りに甚しければ、その惡にくまれ者は遂に亂をなすに至るであらう。かく貧を惡んで分に安んぜず、人を惡んで狹量なるは、共に亂をひきおこすもとである。

子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也而已。

【讀方】 子曰く、若し周公の才の美ありとも、驕きやう且つ吝りんならしめば、其餘は觀るに足らざるのみ。

【字義】 ○驕、驕慢○吝、吝嗇 ○其餘、才能の美。

【義解】 孔子曰く、周公の如き才能を持つてゐても、その人にして驕慢にして人を

悔り、吝嗇にして義理に背けば、其餘の周公の如き才能も觀るに足りないものである。

子曰、三年學不至於穀、不易得也。

【讀方】 子曰く、三年學んで穀に至らざるは、得易からざるなり。

【字義】 ○穀、食祿。

【義解】 三年の久しい間學問を忠實に學んで倦まず、而も食祿を欲し官途に就くを求めなければ、その人の志す所高遠であつて、かゝる人は今の世には得難いものである。

子曰、篤信好學、守死善道。危邦不入、亂邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。

【讀方】 子曰く、篤く信じて學を好み、死を守つて道を善くす。危邦には入らず、亂邦には居らず。天下道有れば即ち見れ、道無ければ則ち隱る。邦道ありて貧且つ賤しきは恥なり。邦道無くして富み且つ貴きは恥なり。

【字義】 ○善道、道を害しない○見、出でて仕へる○隱、かくれて仕へない。

【義解】 子曰く、道を信ずること篤く、學を好むこと深く、道のためには死すとも顧みないのは眞の君子である。而して危く滅びやうとする國には入らず、綱紀亂れた國には長く居らない。天下に道があれば則ち仕へ、道無ければ則ちかくれて仕へない。治世に於て貧賤なのは士たるものの恥であり、亂世に於て富貴なのは又士たる者の恥辱である。

子曰、不在其位、不謀其政。

【讀方】 子曰く、其位に在らずしては、其の政を謀らず

【義解】 孔子曰く、其の職務官位がなければ、其の政治をかれこれと批判し謀議しなす。

子曰、師摯之始、關雎之亂、洋洋乎盈耳哉。

【讀方】 子曰く、師摯の始、關雎の亂、洋洋乎とて耳に盈つるかな。

【字義】 ○師摯、魯の樂師○始、治の訛ならんといふ、治は奏すること○關雎、詩の周南の首章○亂、をはり○洋洋乎、美盛の貌。

【義解】 孔子曰く、魯の樂人師摯の關雎の樂を奏するや、その終りの所は調子は聲美はしく盛んにして、今も耳一杯に盈ちてゐるやうな感じがする。

子曰、狂而不直、侗而不愿、慥慥而信、吾不知之。

【讀方】 子曰く、狂にして直ならず、侗にして愿ならず、慥慥として信ならざるは、吾れ之を知らず。

【字義】 ○狂、志の大にして行の伴はないもの○侗、無知の貌○愿、謹厚○慥慥、才能なき貌。

【義解】 孔子曰く、狂者は志大にして行伴はないものだが、性正直なれば教ふるに足りるけれども、正直でなければ之を如何ともすることは出来ない。無知なる者は謹しみ深いものなのに、侗なる上に謹厚を缺く者であつたら、之れ亦見るに足りない。

材能なき人は大抵信實のある者なのに、何の取柄もない上に不信であれば、それ亦之を如何ともすることが出来ないものである。

子曰、學如不及、猶恐失之。

【讀方】 子曰く、學は及ばざるが如くし、猶ほ之を失はんことを恐る。

【義解】 學問をするに力の及ばないことを心配して一意専心努力し、猶ほ覺えたこととは失はないやうにつとめるが學問をする仕方である。

子曰、巍巍乎舜禹之有天下也、而不與焉。

【讀方】 子曰く、巍巍乎たり、舜禹の天下を有つや、而して與からず。

【字義】 ○巍巍乎、高く大きな貌○不與、政事に與らずして賢者に委任する。

【義解】 孔子曰く、高く大いなるかな舜や禹の天下を領有するや、賢人有才の人を舉げて政をさせて、自分は政事に參與しなかつたことよ。之れ大功を建てた所以である。

子曰、大哉堯之爲君也、巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之。蕩蕩乎民無能名焉、巍巍乎其有成功也。煥乎其有文章、

【讀方】 子曰く、大なるかな堯の君たるや、唯天をのみ大なりとす。唯堯之れに則る。蕩蕩乎たり民能く名づくるなし。巍巍乎として其れ成功あるなり。煥乎として其れ文章あるなり。

【字義】 ○則之、天を手本とする○蕩蕩乎、廣遠の貌○煥乎、光明の貌○成功、事業○文章、禮樂法度。

【義解】 孔子曰く、堯の徳は大なるもので天を手本として其の化を行ひ其の徳を布いてゐる。故に天の高さに比すべきである。又其の徳の廣遠なることは何人も形容することは出来ない、其の事業の成功は巍巍乎として高大に、其の禮樂法度の文飾は煥然として光り輝いてゐる。

舜有臣五人而天下治。武王曰、予有亂臣十人、孔子曰才難、不其然乎、唐虞之際、

於斯爲盛、有婦人焉、九人而已。三分天下有其二、以服事殷、周之德其可謂至德也已矣。

【讀方】 舜臣五人ありて天下治まる。武王曰く、予に亂臣十人あり、孔子曰く、才難しと、其れ然らずや、唐虞の際斯に於て盛なりとす、婦人あり、九人のみ。天下を三分して其の二を有ち、以て殷に服事す、周の徳は其れ至徳と謂ふべきのみ。

【字義】 ○臣五人、禹稷臯陶伯益 ○亂臣十人、亂は治むるで國事を治むる人十人、太公望、周公、召公、畢公、榮公、大顛閔、天散宜生、南宮适、邑姜 ○才難、人才は得難し。

【義解】 舜に賢臣五人あつて天下がよく治つた。武王のいふには予に輔佐の臣十人あると。孔子曰く賢才は得難しといふが誠にその通りである。唐(堯)虞(舜)の際と周とは盛大時代である。而して十人の内一人邑姜は婦人だからあと九人だけである。才人多しといつても僅か九人では人才が得難いことがわかる。しかし周の徳は大で、

文王の時天下の三分の二を領有してしかも殷に事へてゐた。誠に至徳といふべきである。

子曰、禹吾無間然矣。菲飲食而致孝乎鬼神、惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。

【讀方】 子曰く、禹は吾れ間然することなし。飲食を菲うして孝を鬼神に致し、衣服を惡うして美を黻冕に致し、宮室を卑しうして力を溝洫に致す、禹は吾れ間然することなし。

【字義】 ○間然、批難すべきさま ○菲、薄い ○致美乎黻冕、黻はなめし皮で作つた膝蔽ひ、冕は冠、祭時の冠衣を立派にすること ○溝洫、ともに、みどること。

【義解】 孔子曰く、禹王は一點の批難しやうがないほど立派な人である。自己の飲食を儉約にして宗廟の祭には供物を澤山あげて孝を盡し、平生の衣服を粗末にして祭時の衣冠を立派にし、宮殿居室を粗末にして溝洫を作ること力盡し以て民の農事

を勵められた。實に禹は非議すべき寸毫の間隙もない人である。

子罕第九

此の篇すべて三十三章。

子罕言利與命與仁。

【讀方】 子罕に利と命と仁とを言ふ。

【義解】 孔子は利と命と仁とを説くこと極めて罕であつた。その譯は多く利を言へば義は外れることあり、天命は人力のはかり知れざる所があるし、仁は至徳至大のもので言ひ盡し難いものであるからである。

達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣。

【讀方】 達巷黨の人曰く、大なる哉孔子、博く學んで名を成す所無し。子之を聞いて

て門弟子に謂つて曰く吾れ何をか執らん。御を執らんか射を執らんか、吾は御を執らんで通ぜざる所なく、しかも一技一藝について名をあげようとはしない、そこが孔の大なる所である。それを孔子がきかれてわざと謙遜して門人に曰く、私は左様に賞められるやうな者ではない。私には何の仕事が宜しからう、御者か、射術か、私は馬車の御車でもしようか。

【義解】 達巷黨の人が孔子を呼めて曰く、孔子は大なる人物であるよ、彼は博んで通ぜざる所なく、しかも一技一藝について名をあげようとはしない、そこが孔の大なる所である。それを孔子がきかれてわざと謙遜して門人に曰く、私は左様に賞められるやうな者ではない。私には何の仕事が宜しからう、御者か、射術か、私は馬車の御車でもしようか。

子曰、麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。今拜乎上泰也。雖違衆吾從下。

【讀方】 子曰く、麻冕は禮なり。今や純にするは儉なり。吾は衆に従はん。下に拜するは禮なり。今や上に拜するは泰なり。衆に違ふと雖も、吾は下に従はん。

【字義】 ○麻冕、麻布を黒く染めて作つた冠 ○純、絹絲 ○泰、驕る。

【義解】 孔子曰く、麻の冠は古の禮であるが、今は絹絲で作る。それは儉約からきてゐる。之は古禮ではあるが儉素から起つたこととて吾れは衆くの人の風に從はう。又臣下が君を拜するに堂下に於てするは古の禮である。今之を堂上に於てするのは驕慢から起つたことである。故に吾は衆人に違ふけれども古禮に從はう。

子絶四、母意母必、母固、母我。

【讀方】 子四を絶つ、意母く、必なく、固母く、我母し。

【字義】 ○絶、無くする ○母、無と同じ ○意、私意、○必、期待 ○固執念、かたいち ○我、私慾。

【義解】 孔子は私意期待執念私慾の四念を絶つて、公正無私の境地に居られた。

子畏於匡、曰、文王既没、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何。

【讀方】 子匡に畏る、曰く、文王既に没す、文茲に在らざるか。天の將に斯の文を

喪ぼさんとするや、後死の者斯の文に與るを得ず。天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人其れ予を如何。

【字義】 ○子畏於匡、匡は宋の邑名、孔子匡にて陽虎の亂にあつて苦しまれたこと ○文不在茲乎、文は禮樂法度、茲は孔子自身をいふ ○喪斯文、禮樂をなくする ○後死者、文王が既に没す、後に死する者とは孔子自らの事。

【義解】 孔子匡を過ぎた時、容貌が陽虎に似てゐるといふので匡人に圍まれて危いことがあつた。その時孔子は從容として門人を勵まし匡人を戒めて曰く、文王が没してから後、禮樂法度に通ずる者は私のみである。天が若しも斯の禮樂法度を喪ぼさうとするならば、私はそれを與り知ることが出来ない筈である。しかるに私がそれを知つてゐるのは天が斯文を喪ぼす意志がないからである。天の斯文を喪ぼす考がなければ匡人が如何にしても私を殺すことは出来ない。それは天命に叛くからであつて、若し私が居らなければ斯文を後世に傳へることが出来ない爲めである。

大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也。子貢曰、固天縱之將聖、又多能也。子聞之曰、大宰知我乎。吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉、不多也。牢曰、子云、吾不試故藝。

【讀方】 大宰子貢に問ふて曰く、夫子は聖者か、何ぞ其れ多能なる。子貢曰く、固より天之を縱して將聖なり、又多能なり。子之を聞いて曰く、大宰は我を知るか、吾れ少なるや賤し、故に鄙事に多能なり。君子多ならんや、多ならざるなり。牢曰く、子云ふ、吾試ひられず故に藝と。

【字義】 ○大宰、官名、大夫の職、ここは吳の大宰嚭ならんといふ○縱、許す○將聖、ほとんど聖人の域に至る○牢、孔子門人、姓は琴名は牢字は子開○試、用ひる。

【義解】 大宰の職にある人が子貢に問うて曰く、孔子は多能なる人故に聖人ともいふべき人であらうかと。子貢が曰ふに、天は固より夫子に無量の才能を許す故に聖人といつてもよいであらう。故に又多能である筈だと。孔子が之を聞いて曰ふに、大宰

は私をよく知つてゐる者である。私の年少の頃は卑賤の身分であつたから、微細な事を習つたから多能なることが出来た。しかし君子は必ずしも多能ではない、否寧ろあるを以て貴として多能は問題ではないのであると。孔子の門人子開も亦孔子の言を記して曰く、用ひられなかつた故に諸藝に多能であるといはれたと。

○子曰、吾有知乎哉、無知也。有鄙夫問於我、空如也、我叩其兩端而竭焉。

【讀方】 子曰く、吾れ知あらんや、知なきなり。鄙夫あり我れに問ふに空々如たり、我れ其の兩端を叩きて竭す。

【字義】 ○鄙夫、田夫野人○空々如、無知の貌○兩端、事の始終本末○竭、残らず話す。

【義解】 孔子曰く、私は知識あるものではない。唯田夫野人と雖も私に物を聞かとする者あらば、私はその始終本末をよくよく説き明してやるであらう。

子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫。

【讀方】 子曰く、鳳鳥ほうちやう至らず、河、圖とを出さず、吾れ已ぬるかな。

【字義】 ○鳳鳥、鳳凰といふ靈鳥○河、黄河○圖、八卦の文。

【義解】 孔子歎じて曰く、舜及文王の時鳳凰といふ靈鳥が出、伏羲の時龍馬が背に八卦の文を負つて黄河の中から出たことがあつた。これは聖王の瑞祥であるが、今の世に聖王が出ないのでかういふ奇蹟も見ることの出来ないのは残念なことであるよ。

子見齊衰者、冕衣裳者、與瞽者、見之雖少必作、過之必趨。

【讀方】 子齊衰さいしや者と冕衣裳べんいしやう者と瞽こ者しやとを見、之を見て少せうなりと雖も必ず作たつ、之を過よぎれば必ず趨はしる。

【字義】 ○齊衰者、喪服を着た者○冕衣裳者、貴人の禮装した者○瞽者、目くら○作、起たつ○趨、疾行○少、年若き人。

【義解】 孔子が喪服を着た人と貴人の禮装した人と盲人とを見れば、その人が年少の人でも必ず起たつて敬意を表す。又之等の人々の前を通る時は疾走して行くのを常と

欠